

史跡渋野丸山古墳発掘調査報告書 I

2017

徳島市教育委員会

史跡渋野丸山古墳発掘調査報告書 I

2017

徳島市教育委員会



1 造出調査区全景（南西から）



2 造出調査区全景（南から）



3 平成 26 年度北側くびれ調査区全景（北から）

例　　言

1 本書は徳島市教育委員会が史跡渋野丸山古墳の保存整備を図るために国庫補助事業で実施した発掘調査の報告書である。

2 発掘調査は徳島市教育委員会社会教育課文化財係西本沙織が以下の期間で実施した。

- ①平成 26 年 1 月 6 日～平成 26 年 3 月 31 日
- ②平成 27 年 1 月 7 日～平成 27 年 3 月 13 日
- ③平成 28 年 1 月 18 日～平成 28 年 2 月 26 日
- ④平成 28 年 10 月 4 日～平成 28 年 12 月 28 日

3 本書の編集・執筆は西本が行った。

4 遺構写真・遺物写真の撮影は、西本が行った。

5 本調査で得られた遺物およびその記録資料は、すべて徳島市教育委員会が保管している。広く活用されることを希望する。

6 発掘調査にあたり、古墳の地権者をはじめ、以下の諸氏・諸機関から協力・助言を得た。記して感謝の意を表する。

岩崎正夫※ 大久保徹也 栗林誠治 下田順一 清家章 高島芳弘 高上拓 中村豊
広瀬和雄 藤川智之 渋野公民館 渋野町内会 渋野町文化財保勝会

7 発掘調査および整理作業には、以下の調査補助員および作業員諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

石本芳弘 市川欣也 内輪佐知 岡本靖代 小倉弘 折野絵美 河野勇 紀本宏 佐伯俊裕
坂尾和徳 杉原賢治 長樂弘之 筒井淳一 中野勝美 濱西和雄 宮本信人 山田浩昭

※平成 28 年 3 月、調査整備検討委員会の副委員長を務められていた岩崎正夫氏がご逝去されました。岩崎氏は長年当市の文化財保護審議会委員長を務められたとともに、渋野丸山古墳の保存管理計画策定時には委員長としてご指導いただきました。謹んで哀悼の意を表すとともに、故人のご冥福をお祈り申し上げます。

目次

卷頭図版

例 言

第1章 調査経過 ······	1
1 渋野丸山古墳とその周辺 ······	1
2 これまでの調査 ······	4
3 渋野丸山古墳の構造 ······	5
4 整備に伴う調査 ······	6
第2章 調査成果 ······	10
1 平成 25・26年度の調査 ······	10
南側くびれ調査区 ······	10
北側くびれ調査区 ······	13
2 平成 27 年度の調査 ······	16
後円部東側調査区	
3 平成 28 年度の調査 ······	18
造出調査区	
第3章 出土遺物 ······	22
1 円筒埴輪（朝顔形埴輪） ······	23
2 土師器 ······	24
3 形象埴輪 ······	25
4 小結 ······	25
第4章 総括 ······	32
参考文献 ······	34
報告書抄録	

写真図版目次

- 卷頭図版 1 造出調査区全景（南西から）
2 造出調査区全景（南から）
3 平成26年度北側くびれ調査区全景（北から）
- 図版1 1 平成25年度南側くびれ調査区（北から）
2 平成25年度南側くびれ調査区（南西から）
- 図版2 1 平成26年度南側くびれ調査区（北西から）
2 平成25年度南側くびれ調査区（北から）
3 平成26年度北側くびれ調査区全景（北から）
- 図版3 1 平成26年度北側くびれ調査区（北東から）
2 平成26年度北側くびれ調査区西壁
- 図版4 1 後円部東側調査区西側（東から）
2 後円部東側調査区東側（東から）
- 図版5 1 造出調査区西側（南西から）
2 造出調査区東側（南東から）
- 図版6 1 造出調査区全景（南から）
2 造出調査区拡張部（北東から）
- 図版7 1 造出調査区中央アゼ東壁
2 造出調査区拡張部樹立埴輪（南東から）
- 図版8 円筒埴輪（朝顔形埴輪）
- 図版9 円筒埴輪（朝顔形埴輪）
- 図版10 土師器（笊形土器）
- 図版11 土師器（高杯・壺）
- 図版12 形象埴輪（家・鞍・盾他）
- 図版13 形象埴輪（船）
- 図版14 形象埴輪（船）

挿 図 目 次

図 1 渋野丸山古墳位置図	2
図 2 渋野丸山古墳と周辺遺跡	3
図 3 渋野丸山古墳測量図・調査区配置図	9
図 4 南側くびれ調査区（平成 25 年度）平面図・断面図・立面図	11
図 5 南側くびれ調査区（平成 26 年度）平面図・断面図・立面図	12
図 6 北側くびれ調査区（平成 25 年度）平面図・断面図・立面図	14
図 7 北側くびれ調査区（平成 26 年度）平面図・断面図・立面図	15
図 8 後円部東側調査区 平面図・断面図・立面図	17
図 9 造出調査区 平面図・断面図・立面図	19・20
図 10 円筒埴輪（朝顔形埴輪）	27
図 11 円筒埴輪（朝顔形埴輪）	28
図 12 土師器	29
図 13 土師器・形象埴輪	30
図 14 形象埴輪	31
図 15 渋野丸山古墳墳丘復元図	33

表 目 次

表 1 史跡指定に伴う発掘調査	8
-----------------	---

第1章 調査経過

1 渋野丸山古墳とその周辺

渋野丸山古墳は、徳島市内で最も広大な面積を占める多家良地区の北東部に位置する渋野町に所在する。渋野町は勝浦川下流左岸の西方に位置し、三方向を山塊に囲まれ、その中心を西から東へ多々羅川が流れる扇状地である。

渋野丸山古墳は、隣接する方上町との境に位置する東西方向の山から南東方向に延びる丘陵先端部を切斷して築かれた前方後円墳である。古墳の築造年代は墳丘形状、出土埴輪、土師器などから古墳時代中期前葉に比定される。東西主軸の墳丘は前方部、後円部ともに三段に築かれているが、現在土砂や耕作土によって第一段は埋没している。墳丘全長 105m、周濠を含めた全長は 118m と、徳島県内では最大、四国でも富田茶臼山古墳（香川県さぬき市）に次いで第二の規模を誇る。南側くびれ部に造出を付し、周濠は山側を一部省略した盾形周濠である。

渋野丸山古墳の周辺には、未盗掘の埋葬施設をもつと考えられるマンジョ塚2号墳をはじめ、箱式石棺が発掘された新宮塚古墳、円墳と考えられる天王の森古墳などが古墳群を形成している。天王の森古墳（県指定史跡『渋野の古墳』）は直径 23m、高さ 3.5～6 m の円墳である。墳頂部が神社の社殿建築のために平坦になっており、周囲もコンクリート壁で覆われ、内部主体や出土遺物も不明だが、社殿の建築の際に天井石が出たという言い伝えもある。新宮塚古墳（県指定史跡『渋野の古墳』）は、渋野丸山古墳の南東約 750m の丘陵先端部に位置する直径 12m、高さ約 2 m（または直径 20m、高さ 6 m）の円墳で、現在は古墳上に神社が建てられている。昭和 27（1952）年に箱形石棺が発掘され、副葬品として鏡や玉類、鉄刀、鉄剣などが出土し、古墳時代中期の築造と考えられる。花折塚古墳（県指定史跡『渋野の古墳』）は現在所在地不明となっており、すでに消滅していると考えられる。1918（大正 7）年に発掘され、当時の記録によると直径 16m、高さ 1.7m ほどの円墳で、組合式の箱形石棺が内部主体に使われていたという。『勝浦郡志』によると、石棺の中からは 2 本の直刀が出土している。マンジョ塚古墳（県指定史跡『渋野の古墳』）は現状では畠地になってしまっていると想われる。直径 12m 程の円墳で、古くは鏡、三鈴、鉄剣などが出土したとされるが、遺物は戦災によって所在不明となっている。また、輪燈が貼り付けられた馬形埴輪片とメノウ製の勾玉が出土品として伝わっている。マンジョ塚2号墳は、徳島平野南部を流れる多々羅川左岸に位置する丘陵上に築かれた古墳である。平成 11（1999）年に市道拡幅工事に伴い調査を行い、埋葬施設の蓋石を確認した。測量調査の結果、墳形は円墳の可能性が高いと考えられ、マンジョ塚古墳と同じ尾根続きにあることからマンジョ塚2号墳と呼称されるようになった。平成 21（2009）年には、再度確認調査を行い、墳頂では東西に長さ 4.7m の結晶片岩製の埋葬施設の蓋石がすべて残存していることが判明した。部分的に薄く粘土が残存することや、蓋石と蓋石の隙間に石が詰められている状況などから、未盗掘の埋葬施設であると考えられる。山の斜面を利用してつ

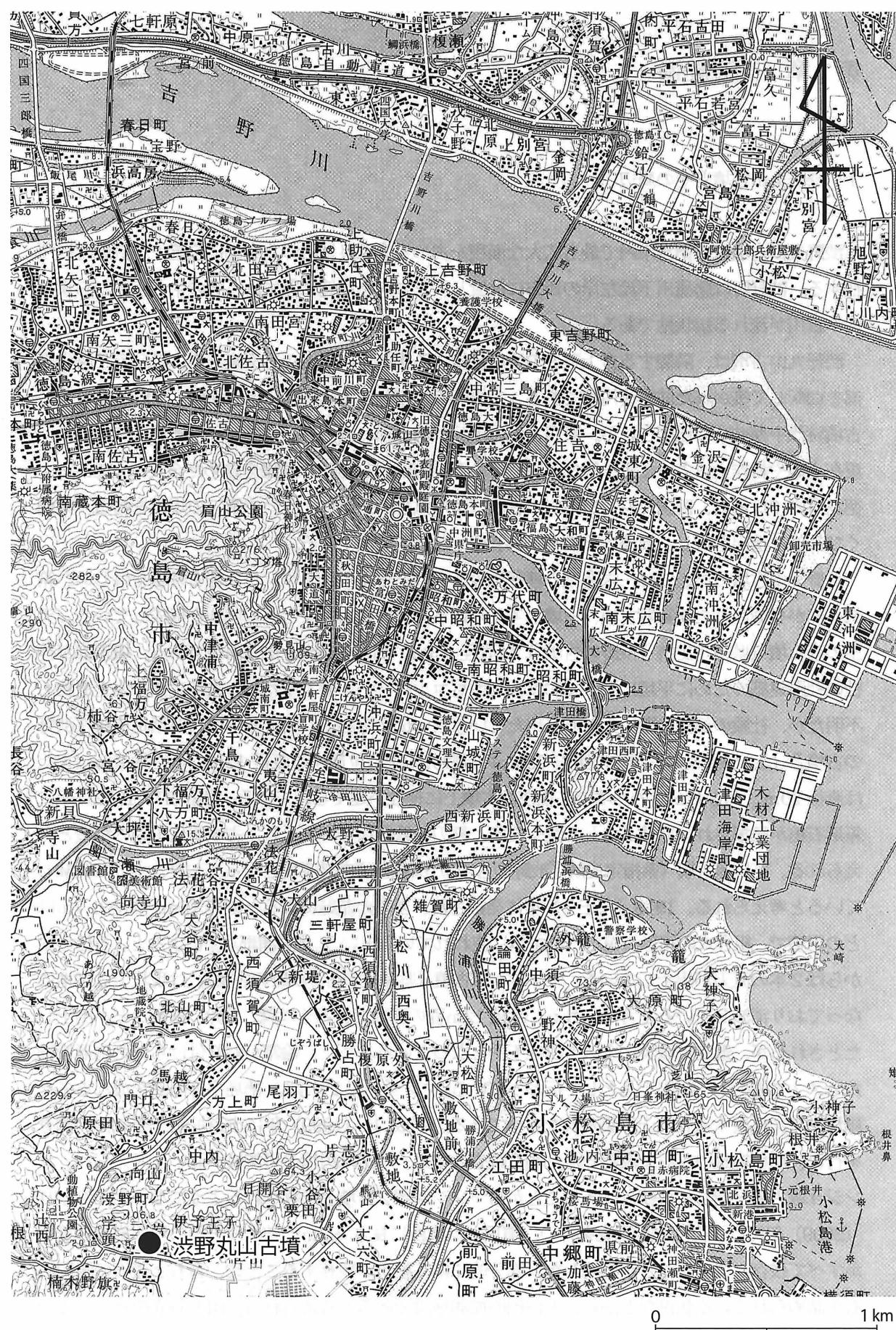
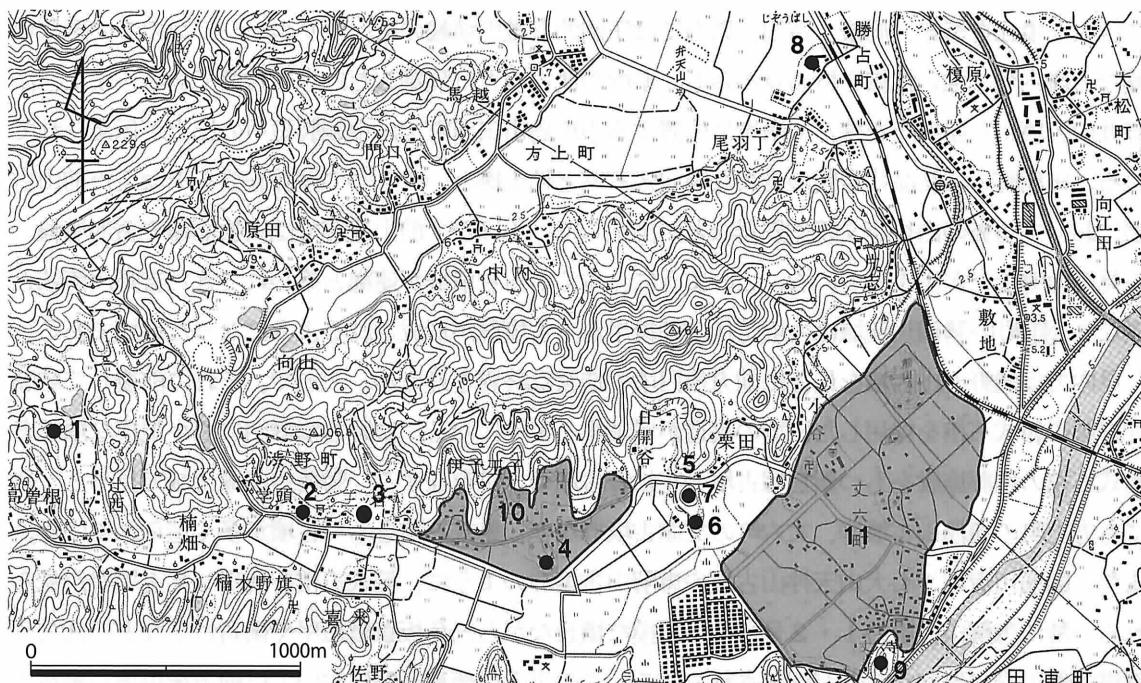


図1 活野丸山古墳位置図（国土地理院発行 1:50000 地形図『徳島』使用）



1 (伝) 経塚 2 天王の森古墳 3 渋野丸山古墳 4 新宮塚古墳 5 花折塚古墳(所在不明) 6 マンジョ塚古墳(消滅)
7 マンジョ塚2号墳 8 鶴島山古墳群(消滅) 9 丈領古墳(消滅) 10 渋野遺跡 11 丈六遺跡

図2 渋野丸山古墳と周辺遺跡 (国土地理院発行 1:25000 地形図『徳島』使用)

くられており、平成11年度の調査成果ともあわせて直径約30m前後の円墳と想定している。円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪などの破片が出土しており、円筒埴輪の特徴や古墳の立地から見て、渋野丸山古墳など周辺の古墳に前出する古墳時代前期後半の築造と考えられる。

県内では、古墳時代前期に吉野川下流域の徳島市宮谷古墳をはじめとする気延山古墳群や石井町前山古墳群、鳴門・板野古墳群と呼称される鳴門市天河別神社古墳群、板野町愛宕山古墳などが築造される。吉野川下流域は弥生時代終末期から供献土器を伴う墳丘墓が造られてきた地域である。また、徳島市奥谷1号墳や八人塚古墳は阿波・讃岐地域に特徴的な積石塚であり、吉野川中流域には同様に積石で築かれた三好郡東みよし町丹田古墳がある。吉野川流域では、古墳時代前期後半の鳴門市大代古墳や石井町山ノ神古墳を最後に前方後円墳は見られなくなるが、それ以降も鳴門市の尼塚・カニ塚古墳や阿波市の土成丸山古墳など中規模の円墳は築かれている。一方、渋野丸山古墳の所在する勝浦川下流域に古墳が出現するのは、古墳時代前期後半頃である。渋野丸山古墳から東に1kmの丘陵上に所在するマンジョ塚2号墳からは、三角形の透かし穴やタテハケ調整を施された川西編年II期に相当する円筒埴輪をはじめ、家形埴輪や蓋形埴輪などの形象埴輪、そして未盜掘の埋葬施設の天井石と考えられる石列が見つかっている。また、勝浦川の北側を東西に流れる園瀬川流域では銅鏡と筒形銅器が出土したと伝わる勢見山古墳や、鍬形石などの腕輪形石製品を多く副葬した円墳の巽山古墳など、前期後半の古墳が見られる。続いて古墳時代中期に勝浦川下流域に築造されたのが100mを超える前方後円墳の渋野丸山古墳である。渋野丸山古墳は尾根を切って低地

に巨大な墳丘を築き、周濠、造出、県内では圧倒的な量の埴輪の数、バリエーションの多い形象埴輪など畿内色の強い様相を持つ点からも、県内の他古墳とは隔絶した内容の古墳である。また、渋野丸山古墳から勝浦川を挟んで南岸に位置する小松島市田浦町では金銅製短甲の出土が伝えられている。田浦町では結晶片岩製の長大な竪穴式石室と粘土櫛という2つの埋葬施設をそなえた前山古墳において仿製の内行花文鏡や鉄器などが出土しているほか、前山遺跡では人物埴輪や蓋形埴輪、石見型埴輪などが出土している。このように、古くから古墳群が連綿と築かれてきた吉野川流域と異なり、園瀬川・勝浦川流域は古墳時代前期後半から古墳群が形成されるようになった地域である。

県内では渋野丸山古墳を最後に前方後円墳の造営は終焉を迎える。一方で、それに前後して結晶片岩製の箱式石棺を採用した円墳の築造が増加するようになる。渋野古墳群内にも小規模な墳丘と箱式石棺の埋葬施設をもつ新宮塚古墳や花折塚古墳などが存在する。勝浦川流域全域で見ると、他にも方上町の鶴島山古墳群、丈六町の丈領古墳群など、箱式石棺をもつ古墳が多く造られている。また、園瀬川流域でも犬山天神山古墳や恵解山古墳群のように、箱式石棺を使用した古墳群が見られる。特に恵解山古墳の1・2号墳は小規模な墳丘ながら三角板鋲留短甲や衝角付甲などの武具や鉄鎌や鉄刀など豊富な武器が副葬されている。このように徳島平野においては前方後円墳が築造されなくなって以降も多くの在地色の濃い古墳が営まれていたことから、この地域が主要河川流域を拠点として発展を遂げていたということがわかる。

古墳時代後期～終末期には、吉野川下流域では徳島市矢野古墳、穴不動古墳などの結晶片岩製の横穴式石室を持つ円墳が築かれるようになる。吉野川中流域では美馬市の太鼓塚古墳、棚塚古墳などに代表される段の塚穴型と呼称される石棚を持つ特徴的な横穴式石室が造られる。園瀬川・勝浦川流域では巨石を使用した横穴式石室が露出した小松島市弁慶の岩屋古墳や、結晶片岩の割石を積んだ横穴式石室が開口した徳島市樋口古墳群などが特徴的な終末期古墳として挙げられる。大正12年の『勝浦郡志』には、渋野丸山古墳西側の八幡神社境内にも羨道の長い横穴式石室が2基あったという記述があるが、現在は確認できない。

勝浦川下流域は、古墳時代前期後半から先に述べたような古墳が出現し、このうち圧倒的な規模を誇る渋野丸山古墳が徳島では最後の前方後円墳となる点でも、古墳時代の徳島における社会・政治秩序の画期を考える上で重要な地域である。そして、渋野丸山古墳の被葬者はそれ以前の鳴門・板野古墳群や氣延山古墳群などの被葬者とはまた異なった地域基盤を持ち、古墳時代前期後半から中期にかけて畿内とのつながりを強め、勢力をもった集団であることが想像できる。

2 これまでの調査

渋野丸山古墳は、大正12（1923）年刊行の『勝浦郡志』によると、大正4（1915）年に開墾中の地権者によって発見され、郷土史家により前方後円墳と認識されたとある。その後、昭和27（1952）年には地元住民により渋野古墳保勝会が結成された。翌年の昭和28（1953）年には、渋野丸山古

墳が周辺の新宮塚古墳、天王の森古墳、花折塚古墳、マンジョ塚古墳とともに「渋野の古墳」として県史跡に指定されている。

昭和 63（1988）年には当時指定地外となっていた後円部東側にあった民家が建替工事を計画したため、徳島市教育委員会が発掘調査を実施した。当該地は後円部の一部にあたるという調査成果から、徳島市文化財保護審議会が土地の公有化を求める要望書を県教育委員会へ提出したが、受け入れられなかつた。これをきっかけに保存運動が起り、県内有志によって「渋野丸山古墳を守る会」が結成された。平成 2（1990）年に募金や県民からの寄付によって守る会が当該部分を買い上げたのち、翌年土地は徳島市に寄贈され、追加指定と現地への説明板設置が実現した。

平成 11（1999）年には古墳南側の市道拡幅および河川付け替え工事が計画されたため、保存協議に向けた見解を得るために発掘調査が行われ、周濠の存在が確認された。開発部局との協議の結果、南側に車道位置をずらすための設計変更が行われた。これらの協議や調査を進めるなかで古墳の県史跡の範囲が明確にされていないことや、将来的に整備活用を図るための基礎資料が不足していることなどが明らかになり、範囲確認のための測量・発掘調査を行う必要があると判断された。そして、平成 16・17 年度に国・県の補助を受けて発掘調査を実施した結果、渋野丸山古墳は盾形周濠、埴輪列、造出などを備える県内最大の前方後円墳であることがわかつた。これらを受けて平成 21（2009）年 2 月には国史跡に指定、平成 24（2012）年には保存管理計画を策定した。

3 渋野丸山古墳の構造

これまでに行われてきた調査の結果、渋野丸山古墳の墳丘は後円部を東に向かって東西主軸に築かれ、墳丘全長 105m、後円部径 69m、前方部幅 59m、くびれ部幅 44m、高さは後円部で 18m、前方部で 16m、周濠を含めた全長は 118m に復元される。墳丘は前方部、後円部ともに三段築成だが、現在は北側の谷川からの土砂および後世の耕作土によって墳丘第一段は完全に埋没している。

外表施設としては墳丘斜面に葺石、第一段および第二段に円筒埴輪列がみられることがわかつた。南側のくびれ部には方壇形の造出の存在が確認されたが、北側には設置されていないことも判明した。周濠は幅 4～13m を測り、南側では盾形を呈すが、北側は背面の丘陵に制約されたためか墳丘の外側に沿い、北側くびれ部付近の丘陵岩盤で収束し完周しない。このため、周濠全体としては左右非対称である。また、前方部北側の崖面には墳丘に沿って等高線の密な部分がみされることから、周濠を意識して自然地形を整形した可能性もある。現在、周濠南側は平坦な果樹畠となっており、北側は竹林化し墳丘に沿って凹地がわずかに残っている。葺石には古墳近辺で産出する石英質の結晶片岩が使用されている。

埋葬施設については発掘調査が行われていないため詳細は不明だが、大正 12 年発行の『勝浦郡志』によると、石取りのため後円部を掘ったところ平石や積石が出たと記されている。現在後円部中央には緩やかなくぼみが残るほか、レーダー探査では深度約 1 m の地点において、東西主軸の石

室と考えられる約5m×2.5mの反応が認められたほか、盜掘坑と推測される反応も示されている。

出土遺物は、家形埴輪・盾形埴輪・蓋形埴輪・甲冑形埴輪・船形埴輪などの形象埴輪や、円筒埴輪、朝顔形埴輪、土師器が出土している。円筒埴輪は黒班と円形の透かし孔をもち、突帯2~3段、やや小ぶりで外面調整はタテハケののちB種ヨコハケで、10種類を超えるヘラ記号が確認されているほか、一部に線刻、赤色塗彩を施したものもみられる。これらの特徴から、川西宏幸氏の円筒埴輪編年III期に該当し、古墳時代中期前半の所産としている（下田2006）。

4 整備に伴う調査

（1）調査の目的と経過

渋野丸山古墳の史跡指定以前の調査は墳丘及び周濠規模の確定のために行われており、墳端や周濠の立ち上がり等をとらえることが主目的であった。このため、後円部やくびれ部の構造、特に耕作地であった墳丘南側の調査は不十分であり、今後古墳を保存整備するために必要な情報が得られているとは言えない。平成24年度に策定した『史跡渋野丸山古墳保存管理計画』においても、保存整備の前提として墳丘およびその周辺施設の規模と構造を調査で詳細に把握することが必要であるとしている。また、葺石や埴輪列など外表施設の残存状況や、これまでの調査で判明していないくびれ部の状況や主軸上の墳裾の確認、造出の規模などについても整備手法を検討する上で重要であり、調査の必要性が調査整備検討委員会の中で提案された。

これを受けて平成25・26年度には墳丘南側第三段のくびれ部付近の形状や葺石の残存状況、段築の構造、そして墳丘の第一段から二段にかけてのくびれ部形状や整形手法の解明のための発掘調査を行った。平成26年3月15日には現地説明会を開催し、約80名の参加者があった。平成27年度には後円部東端の確認と周濠外周の遺構確認を行った。平成28年度には墳丘南側に設けられた造出の規模や構造を把握するための発掘調査を行った。平成28年12月17日には現地説明会を開催し、約80名の参加者があった。

（2）史跡渋野丸山古墳調査整備検討委員会

平成24（2012）年度に史跡渋野丸山古墳調査整備検討委員会を立ち上げ、古墳の保存整備及び発掘調査についての検討を進めている。調査に際しては、検討委員会および文化庁文化財部記念物課、徳島県教育委員会教育文化課の指導助言を受け、徳島市教育委員会が行った。検討委員会の構成については次のとおりである。なお、括弧書きのない委員の所属は平成28年度のものである。

委員長 大久保 徹也 徳島文理大学文学部文化財学科教授

副委員長 岩崎 正夫 前徳島市文化財保護審議会委員長（～平成27年度）

委員 高島 芳弘 前徳島県立博物館館長

委 員 清家 章 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授
委 員 中村 豊 徳島大学ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部准教授
委 員 下條 敏也 渋野町内会会長

指導助言 内田 和伸 文化庁文化財部記念物課文化財調査官（～平成 25 年度）
中井 將胤 文化庁文化財部記念物課文化財調査官（平成 26 年度）
五島 昌也 文化庁文化財部記念物課文化財調査官
早渕 隆人 徳島県教育委員会教育文化課課長補佐
林 賢彦 徳島県教育委員会教育文化課社会教育主事（～平成 26 年度）
岡田 圭司 徳島県教育委員会教育文化課主任主事（平成 27 年度）
島田 豊彰 徳島県教育委員会教育文化課社会教育主事

事務局 松平 芳典 徳島市教育委員会社会教育課長（～平成 26 年度）
西名 武 徳島市教育委員会社会教育課長
杉本 正春 徳島市教育委員会社会教育課課長補佐（～平成 25 年度）
建島 美穂 徳島市教育委員会社会教育課課長補佐
勝浦 康守 徳島市教育委員会社会教育課文化財係担当課長補佐兼係長
三宅 良明 徳島市教育委員会社会教育課文化財係主任主査兼係長
宮城 一木 徳島市教育委員会社会教育課文化財係主事
西本 沙織 徳島市教育委員会社会教育課文化財係主事



検討委員会の開催風景

表1 史跡指定に伴う発掘調査

調査年度	調査箇所	調査成果
第1次調査 (平成11年度)	第1トレーニチ	周濠の底部、立ち上がり、肩部を検出した。周濠は地山を掘削し作られており、肩部から周濠底までの深さは約1.4mを測る。堆積状況から、周濠はある程度埋まつたあと、滯水状態にあったと考えられる。
	第2トレーニチ	周濠の立ち上がりを検出した。トレーニチ東側では、時代不明の柱穴が1基確認されている。
	第3トレーニチ	周庭帯の有無確認のために設定したが、確認できなかった。
第2次調査 (平成12年度)	第4トレーニチ	古墳北側の残存状況を確認するために設定し、墳丘第1段平坦面裾部に溝、墳丘第2段斜面、埴輪列、ピットを検出した。崩落した葺石や埴輪片も多数出土している。また、T.P.約10m未満の墳丘については地山削り出しによって、第2段斜面途中のT.P.約10m以上の部分については盛土によって構築されていることがわかった。埴輪列は地山を布掘りした溝状の掘り方に配置されており、芯芯間の距離は約40cmである。
第4次調査 (平成14年度)	第5トレーニチ	墳丘第1段斜面の一部および周濠を検出したほか、傾斜変換点を墳裾と認定した。
	第6トレーニチ	地山削り出しによる墳丘第1斜面および周濠、墳裾の基底石を検出した。
第5次調査 (平成16年度)	第7トレーニチ	第3段斜面、後円部頂および埴状の部分を検出したが、葺石は遺存していなかった。
	第8トレーニチ	第1段斜面と周濠を検出した。周濠は断面が逆台形を呈し、地山を削りだして整形している。また、墳端と考えられる部分では、大きな石材が墳丘に長軸を向けて据えられており、基底石と考えられる。
	第9トレーニチ	周庭帯の有無確認のために設定したが、確認できなかった。
	第10トレーニチ	周濠の立ち上がりを確認するために設定したが、明瞭には確認できなかった。
	第11トレーニチ	周濠の規模及び前方部前端面の構造を確認するために古墳の主軸沿いに設定し、周濠及び周濠の立ち上がり、前方部前端及び第1段斜面を検出した。
	第12トレーニチ	前方部北側側面の墳丘構造確認のために調査区を設定し、第1段平坦面、第2段斜面と平坦面、墳丘第3斜面を検出した。岩盤には布掘り状の掘り方が設けられ、円筒埴輪が7本分出土している。また、この埴輪列から約0.3m南側では、平坦な岩盤直上に意図的に倒立させたと考えられる状態で円筒埴輪4本が出土している。
	第13トレーニチ	墳端、周濠の規模及び形状確認のために設定したが、湧水のため周濠の底、墳端は検出できなかった。
	第14トレーニチ	墳丘第2段斜面と平坦面、墳丘第3段斜面、前方部頂の平坦面を検出した。第3段斜面の裾部には、基底石を斜面に沿うように上下を少しずらした2段の横積みにし、その上に傾斜角度を少し緩やかにして小口積みに葺石を葺いていることがわかった。第1段平坦面は擾乱のため遺存していなかった。
	第15トレーニチ	周濠の肩部を検出したが、湧水により底部にはいたらなかった。
	第16トレーニチ	周濠、墳丘第1段斜面及び墳端、基底石を検出したが、葺石は遺存していなかった。
	第17トレーニチ	前方部第1段斜面、造出、周濠底部の一部を検出した。造出の上面構造については不明だが、造出斜面の下部については葺石が遺存していた。
	第18トレーニチ	造出の斜面を確認したが、平坦面の構造については削平が著しく不明であり、第17トレーニチで確認したような造出斜面の葺石も見られなかった。
	第19トレーニチ	地山を削り出した造出、周濠及び後円部墳裾部を検出した。造出斜面直上では、崩れた葺石や埴輪片の間から土師器の小型丸底壺や高杯がまとめて出土した。後円部墳端では葺石および基底石が残存していた。
	第20トレーニチ	周濠、第1、2段目および第3段の斜面を検出した。周濠埋土からは転落した葺石や円筒埴輪片が多量に出土した。
	第21トレーニチ	周濠および墳丘第1段を検出した。周濠が岩盤に向けて収束していくことから、第21トレーニチ付近から西へ周濠は続かないと考えられる。また、第1段平坦面では岩盤を浅く溝状に布掘りし、その中に直径30cm、深さ2cmの円形の掘り方が検出されており、円筒埴輪を樹立していたと考えられる。
	第22トレーニチ	周濠および第1段斜面を検出した。基底石が残存している部分もあったが、墳丘および葺石は擾乱により遺存状態は悪い。
	第23トレーニチ	周濠、墳丘第1段斜面及び平坦面を検出した。また、岩盤を浅く溝状に布掘りし、その中に直径30cmの円形の掘り方をつくり円筒埴輪を樹立している。ただし、各埴輪は等間隔には並べられていなかった。
	第24トレーニチ	前方部北側側面を整形する際に、前方部北側に延びる尾根を斬ち切るように岩盤を大きく削っていることがわかった。
	第25トレーニチ	周濠を検出した。周濠底は地山を掘削し平らに仕上げられていたほか、埋土からは崩落した葺石が集中して出土した。
	第26・27トレーニチ	地山を掘削して整形された周濠外側斜面を検出した。
	第28・29トレーニチ	地山を掘削し整形された周濠の外肩部に近い部分が検出された。また、幅約2mの時代不明の溝も確認された。
	第30・31トレーニチ	地山が多々羅川に向けて徐々に下がっていく様子を確認した。また、調査区北側では地山掘り込みによる3本の溝を確認し、埋土からは中世の土器片が出土した。古墳に関係する遺構は検出できなかった。
	第32トレーニチ	周庭帯の有無の確認のために調査区を設定したが、古墳に関係する遺構は検出できなかった。



図3 渋野丸山古墳測量図・調査区配置図

第2章 調査成果

1 平成 25・26 年度の調査

南側くびれ調査区 平成 25 年度の調査では、古墳の南側前方部と後円部第三段の接続部であるくびれ部の葺石の一部が表土から 20~30cm 下で良好に残存していた。また、葺石が直線的に積まれた前方部から、ゆるやかなカーブを描く後円部への積み方の変化点を確認した。調査区北側は横方向の葺石が部分的に残っていただけで、多くの葺石が抜け落ちたような状況であった。前方部第三段の葺石の積み方の特徴としては、比較的大きな石材を横方向に積み、その上に小ぶりの石材を数段小口積みしている。縦方向と横方向に数段ずつ交互に石を積む作業単位が確認できる。横方向に大きな石材を積むことによって石の崩れを防止し、積む工程を進めやすくしたのではないかと考えられる。後円部第三段の葺石は小口状に積まれており、最下段には比較的大きな基底石が据えられている。小口積みにした葺石の下からは裏込めとして用いられたと思われる小礫も見えており、念入りに石を積んでいる様子が見て取れる。また、調査区下方では基底石の南側に葺石のない平坦な面が見られ、この部分が墳丘第二段と第三段の間の平坦面であると考えられる。本調査区内には埴輪列は残存していなかったが、調査区のすぐ南側の崖面に埴輪列の一部と見られる円筒埴輪片が露出している状況を確認しており、テラス面に並んでいた埴輪列が、墳丘が削平されたときにかろうじて残ったものと考えられる。

平成 26 年度は、前年度の調査区に接して北東方向に拡張した調査区を設定した。調査区の南側では表土下 30~50 cm の深さで前年度と同様に転落した葺石が大量に検出され、これらを取り除くと現位置を保った葺石が部分的に残存していた。葺石の並びから、前年度の調査区から続くように前方部から後円部に向けて角度が変わる部分の様子が見て取れるが、後円部側は前方部側と比較すると耕作等による攪乱が多く残存状況は悪い。また、調査区北側は前年度と同様に横方向の葺石が部分的に残っていただけであった。層序については、表土下に耕作土と考えられるにぶい黄褐色層が厚く堆積し、その下に転落石および葺石が残存する。また葺石の直上および石と石の間には盛土由来の流土と考えられる明黄色、赤褐色の層が見られる。葺石の積み方は前年度も確認したように、大きく細長い石材を横方向に並べたあと、小型の石材を数段小口積みするという手法を規則的に繰り返していることがわかる。

古墳に使われている葺石はほとんどが周辺で産出する石英質の結晶片岩であった。基本的には山から切り出した割石が使用されているが、質の悪い山石や結晶片岩以外の川原石もわずかに含まれていた。平成 26 年度の南側くびれ調査区の南東隅では 1 点だけ円形の川原石が検出され、葺石として使用された可能性がある。



図4 南側くびれ調査区（平成25年度）



図5 南側くびれ調査区（平成26年度）

北側くびれ調査区 平成 25 年度の調査では、周濠と、墳丘の第一段の立ち上がりと葺石の基底石を確認した。表土直下、特に山際部分には赤褐色～褐色の厚い堆積があり、北側山斜面からの流土もしくは後世の畑作に由来する耕作土と考えられる。調査区南側の表土直下からは大量の崩れた葺石や円筒埴輪、朝顔形埴輪の破片が出土しており、墳丘北側の上面は後世の耕作等で大きな改変を受けている可能性がある。また、周濠にはマンガンおよび鉄分を多量に含む粘土が薄く何層も堆積しており、特に上層のにぶい黄橙シルト層からは比較的残りの良い円筒埴輪が横倒しになった状態で出土している。周濠と北側墳丘第一段は地山の斜面を削って形を整える地山整形手法によってつくられており、特に調査区北端では露出した山斜面の岩盤を斜めに切り込んで整形している様子が見て取れる。

平成 26 年度は、前年度第一段の基底石が検出されていた箇所の調査区を拡張し、前方部と後円部第一段のくびれ部を確認した。第一段の葺石は基底石とその上に数個残存しているのみで、それより上の葺石はほぼすべて崩落しているが、第一段斜面にも第二段同様に葺石が葺かれていたと考えられる。断ち割り断面の土層からは、地山ブロックを多量に含む固い赤褐色層を削って墳丘が整形されたことがわかった。また、今回第一段平坦面から墳丘第二段の斜面を新たに検出した。第二段斜面は、部分的に攪乱を受け、石材が抜けているものの、横長の基底石の上に小口積みをした葺石が一部良好に残存していた。くびれ部の基底石には細長い石材を横方向に据えている。基底石の下にはやや汚れた土が充填されていることが壁面から見て取れ、地山整形した平坦面直上に基底石を据えたのではなく、ある程度土を充填して基底石を据えたと考えられる。埴輪列の痕跡と考えられる溝状の遺構を北側調査区の第一段平坦面の外側寄りで検出した。この列痕内には汚れた明黄褐色土が溜まっており、埴輪片はほとんど含まれていなかった。前年度の調査では北側周濠の中から大量の円筒埴輪が出土しており、下層には残りの良い状態で廃棄された埴輪もあったことなどから、後世の開墾などの際に人為的に埴輪を抜き取り、周濠内に廃棄した可能性が考えられる。土層は表土直下に耕作土と考えられる明黄褐、明赤褐色層が続き、その下に葺石の転落石と埴輪片を多く含むにぶい赤褐色層が数層にわたって堆積する。また、周濠部分には浅黄色シルトが堆積し、中には多くの葺石の転落石と埴輪片を含む。第一段平坦面の断ち割り調査の結果、第一段平坦面の埴輪列よりも南側には、地山整形と考えられる地山礫を多量に含む橙色層が確認されたことから、二段階の盛土により整形されていることがわかった。地山礫を多量に含むこれらの盛土は、濠や墳丘の整形時に地山を掘り返し、盛土として再使用した可能性が高い。

古墳に使われている葺石はほとんどが周辺で産出する石英質の結晶片岩であった。基本的には山から切り出した割石が使用されているが、質の悪い赤色の山石もわずかに含まれていた。

- (層序)
- 1 表土
 - 2 明黄褐シルト（耕作土）
 - 3 にぶい黄褐土に小礫を多く含む
 - 4 にぶい黄橙シルト
 - 5 にぶい黄橙砂質シルトに
転落石、埴輪片多く含む
 - 6 明褐シルトに小礫を多く含む
 - 7 にぶい褐シルト
 - 8 淡黄砂質シルト
 - 9 明黄褐シルトに小礫を多く含む
 - 10 灰粘質シルト（周濠埋土）
 - 11 橙粘質シルト（周濠埋土）
 - 12 橙砂質シルトに小礫を多く含む
 - 13 橙シルトに小礫を多く含む
(断ち割り部分、墳丘盛土か)

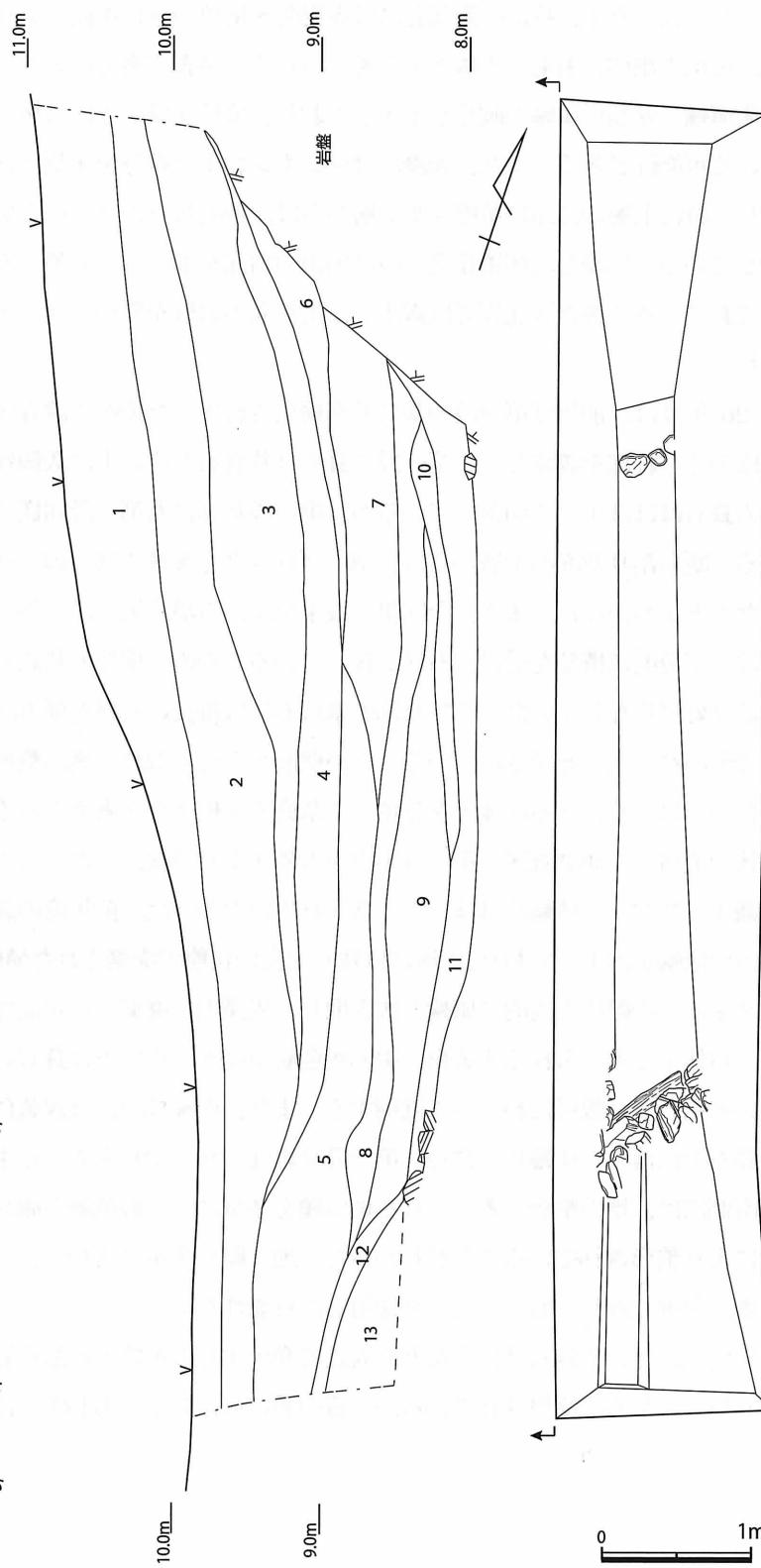


図6 北側くびれ調査区（平成25年度）

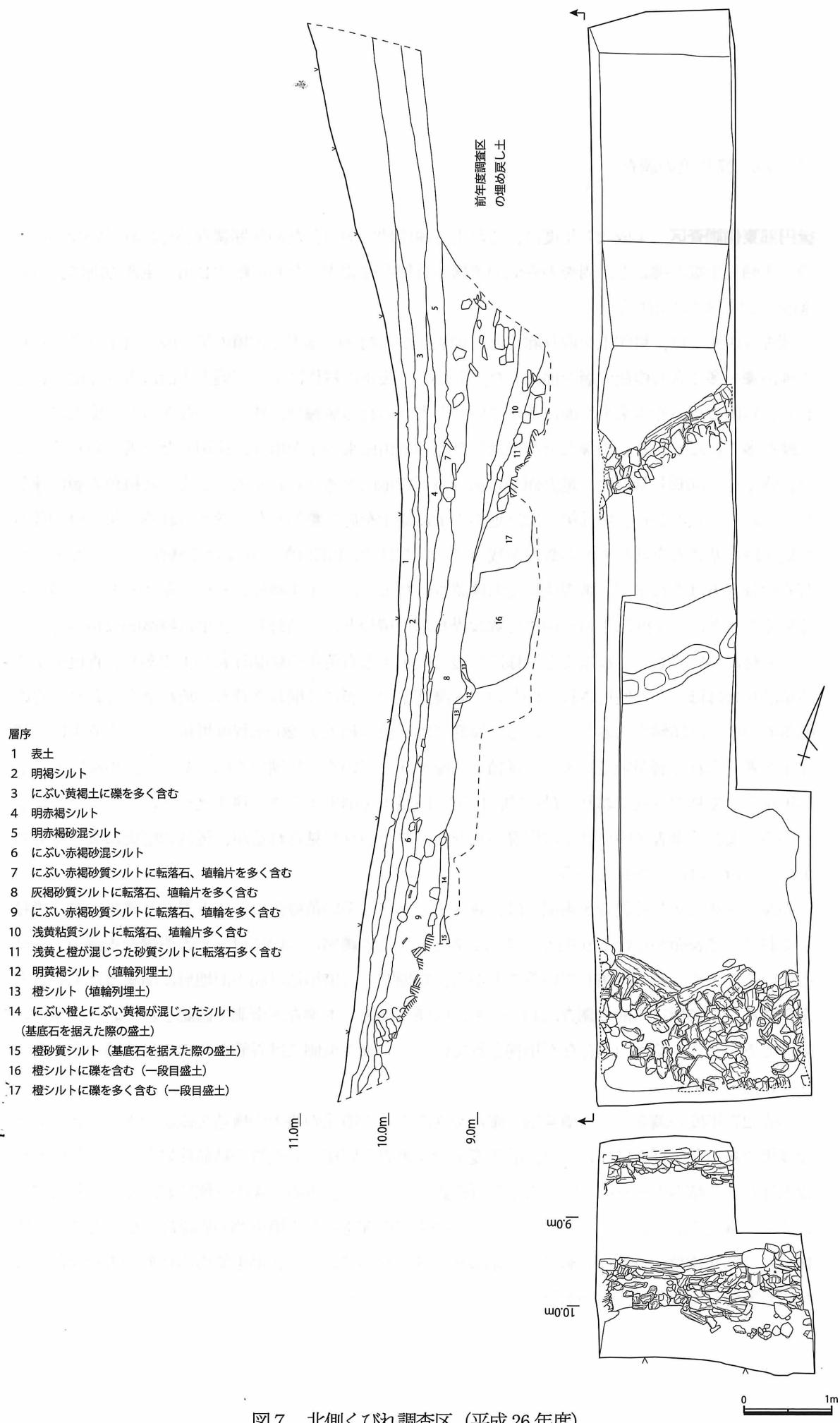


図7 北側くびれ調査区（平成26年度）

2 平成 27 年度の調査

後円部東側調査区 平成 27 年度は、これまで耕作地であったため発掘調査が行われていなかった墳丘主軸上東端の確認と、周濠の外側の遺構の有無を確認するために幅約 2 m、東西方向に長さ約 30m の調査区を設定した。

調査区西側では、耕作土を取り除くと、地表面から約 60 cm 下で古墳の第一段の盛土と考えられる地山礫を多く含む橙色の層を検出した。しかし、後世の耕作によって盛土上面は大きく削られており、斜面の葺石や本来平坦面に並んでいたと考えられる埴輪列は残っていなかった。盛土には地山礫を多く含んでおり、周濠などを掘削した際の地山由来の土を墳丘に使用したと考えられる。また、盛土を一部断ち割ると、地表面から約 1m 下で地山と考えられる固くしまった橙色の層に達した。これらの状況から、墳丘第一段は地山の上に盛土を施し整形したと考えられる。第一段の葺石も最下段の基底石を含む下から数段が残っていただけで、上部は削平を受けて残存していなかった。葺石の葺き方はこれまでの調査成果でも確認されたように、まず細長い石材を基底石として横たえて据えたあとに、正面に小口を向けて数段繰り返し積むという渋野丸山古墳に特徴的な積み方である。石材についても、これまでと同様に周辺で産出する石英質の結晶片岩が主であり、青色を呈する結晶片岩はほとんど使用されていない。周濠埋土の下層には崩れた葺石が流れ込んでおり、その転落石の中には埴輪片も混じっている。濠底には灰色の粘土が 20 cm 程度堆積し、その直上には耕作土と考えられる層が幾度か水平に堆積して濠を埋めている。時期は不明であるが、周濠は古くから田畠として利用されており、最終的には第一段盛土を削平するまで耕作地を広げていったことがわかる。また、調査区中央部では周濠の東端の立ち上がりが見られるが、後世の暗渠によって立ち上がりの肩部は削平されている。

周濠の外側にあたる調査区東側では、耕作土の下ににぶい黄橙色のシルト混じり礫層が厚く堆積しており、地表面から約 1 m 掘ると湧水が著しい。この礫層については、その西端を周濠が一部切っていることや、厚く堆積していることから、短期間で古墳築造以前の旧地形に溜まったものと考えられる。史跡指定以前の調査においても、同様の礫層が本調査区南側で確認されており、東側に向けて下がっていく地山の存在が指摘されていた。周濠の東側には谷筋からの自然流路などが存在していたのであろう。

平成 27 年度の調査は、古墳東端が確定できしたことや墳丘の盛土の構造を確認できたことが大きな成果であった。葺石については、前年度までの調査と同様、石英質の結晶片岩を用いて特徴的な規則性のある積み方を行っていることを再確認した。また、古墳周濠の外側における土地利用についての一端をうかがい知ることもできた。今回東端を確認した古墳東側の周濠は、広いところで約 10m を測る東南側の周濠と比較すると幅 5 m と狭くなってしまっており、古墳東側の旧地形が古墳全体の設計にも影響している可能性がある。



- 1 にぶい黄橙砂質シルト～極細砂
- 2 にぶい黄シルトに明黄褐シルトブロックと炭、小礫含む（旧耕作土）
- 3 にぶい黄褐シルトに炭、小礫含む（旧耕作土）
- 4 明黄褐シルト（旧耕作土）
- 5 橙シルトににぶい褐シルトが混じる（墳丘盛土）
- 6 橙シルトに径10cm前後の地山礫を含む（墳丘盛土）
- 7 橙シルトに地山礫を多く程度含む（墳丘盛土）
- 8 にぶい褐シルト（墳丘盛土）
- 9 にぶい黄橙シルト
- 10 浅黄シルトに灰白シルトと小礫多く含む（暗渠水路に伴う埋土）
- 11 浅黄シルト（旧耕作土）
- 12 浅黄シルトに小礫を少し含む（水路に伴う埋土）
- 13 灰黄褐シルトに礫多く含む（水路に伴う埋土）
- 14 灰黄褐シルトに小礫を少し含む（旧耕作土）
- 15 にぶい黄橙に褐灰シルト含む（旧耕作土）
- 16 にぶい褐シルトに炭、埴輪片含む（旧耕作土）
- 17 灰褐砂質シルト 埴輪片を含む（周濠埋土）
- 18 にぶい黄橙シルト
- 19 にぶい黄橙シルト 転落石、埴輪片を含む（周濠埋土）
- 20 オリーブ灰粘土 木片、転落石、埴輪片を含む（周濠埋土）
- 21 灰オリーブ粘土 木片、転落石を多く含む（周濠埋土）
- 22 黄橙シルト（周濠埋土）
- 23 黄橙シルトに灰白シルト含む（周濠肩部か）
- 24 にぶい褐シルト（周濠埋土）
- 25 黄橙シルトに灰白シルト混じる（周濠埋土）
- 26 浅黄シルトに小礫を含む（旧耕作土）
- 27 浅黄シルト（旧耕作土）
- 28 にぶい黄褐シルトに黒褐細粒砂含む（旧耕作土）
- 29 浅黄シルトに小礫含む（旧耕作土）
- 30 灰黄褐シルト（旧耕作土）
- 31 黄砂質シルトに小礫含む（旧耕作土）
- 32 黄砂質シルトに小礫含む（旧耕作土）
- 33 にぶい黄橙シルトに径10cm未満の礫を多く含む
- 34 にぶい黄橙シルトに小礫を少し含む
- 35 にぶい黄褐砂質シルトに径3cm未満の礫を多く含む
- 36 にぶい黄橙砂質シルトに褐灰シルトを多く含む
- 37 にぶい黄橙シルトに小礫を多く含む
- 38 橙シルトに黒褐層が筋状に混じり、地山礫を多く含む
- 39 青灰シルト

図8 後円部東側調査区

3 平成 28 年度の調査

造出調査区 墳丘南側に取り付けられた造出については、史跡指定以前の調査で盛土と葺石の基底石、土師器壺等が複数点出土したことからその範囲が推定されていたが、当時は果樹園として使用されていたため調査範囲が限られ、その規模や構造の全容は明らかではなかった。古墳の整備事業に向けて、造出の構造を理解するためにはまとまった面積の確認調査が必要であるという意見が検討委員会で出され、当該地の公有化完了後に発掘調査を行うこととなった。

平成 28 年度は古墳南側の果樹園跡に東西 15m × 南北 10m の調査区を設定した。数層にわたる耕作土を取り除くと、調査区北側では地表面から約 20 cm 下で造出盛土の一部と考えられる地山礫を多く含む褐色の層を検出した。また、南側では地表面から約 2 m 下で、幅約 20~30cm の基底石を含む造出斜面下半の葺石と考えられる並びの良い石列および周濠底を検出した。これらの葺石の残存状況から、造出は最下段で東西に約 12m、南北で約 5 m の長方形を呈することがわかった。葺石は基底石を含む下から 2・3 段目までが部分的に残っていただけで、本来斜面上半にも葺かれていたであろう石材は残存していなかった。

また、造出平坦部および後円部との接続部の状況を確認するため、調査区北側の果樹が植えられた一段高い平坦面を北東側に拡張した。掘削を進めると、多量の埴輪片と葺石の転落石が面的に検出されたことから、後世に墳丘第 2 段付近を削平した際の土や葺石を転用してこの部分が造成されたと考えられる。これらの造成土を取り除くと、西側には造出平坦面の一部が、東側には後円部と造出の接続部付近の葺石が残存していた。造出平坦面には南北方向に並ぶ 2 基の円筒埴輪（もしくは朝顔形埴輪）の底部が 2 基残存していたが、掘方は確認できなかった。後円部との接続部付近の造出東側葺石は、南側と同様に横長の基底石の上に石材を小口積みし、北に向けてゆるやかに上がっていく状況が確認できた。さらに、後円部と造出の間の狭く平坦面な部分を埋めるように、幅 30cm 前後の石材を列状に平置きした状況が見られた。

造出における葺石の施工方法については、前年度までの調査でも確認されたように、まず幅約 20 ~30cm の基底石を横方向に据えた上に、石材を規則的に小口積みにしている。葺石に使用された石材のほとんどはこれまでと同様に古墳の近隣で採れる石英質の結晶片岩だが、一部に眉山周辺に特徴的な褶曲の見られる青色の結晶片岩も使われている。

調査の結果、造出の上面はそのほとんどが後世の開墾によって 30 cm 程度削られていることがわかつたが、調査区中央アゼの北東において残存していた埴輪底部の高さを造出平坦面とすると、築造当時の造出の高さは約 2 m であったと推定できる。また、構築方法を確認するために中央アゼに沿って墳丘を一部南北方向に断ち割ったところ、にぶい褐シルトの盛土の下に、地山と考えられるしまった褐シルトを検出した。このことから、地山を削り出した上に盛土をして造出が整形されていると考えられる。

周濠の最下層には崩れた盛土や転落石を多く含む明黄褐色の砂混シルトが堆積し、その上に埴輪片と葺石の転落石を多く含む褐灰色の砂混シルト、浅黄～にぶい黄橙色の粘土の順に堆積が見られ

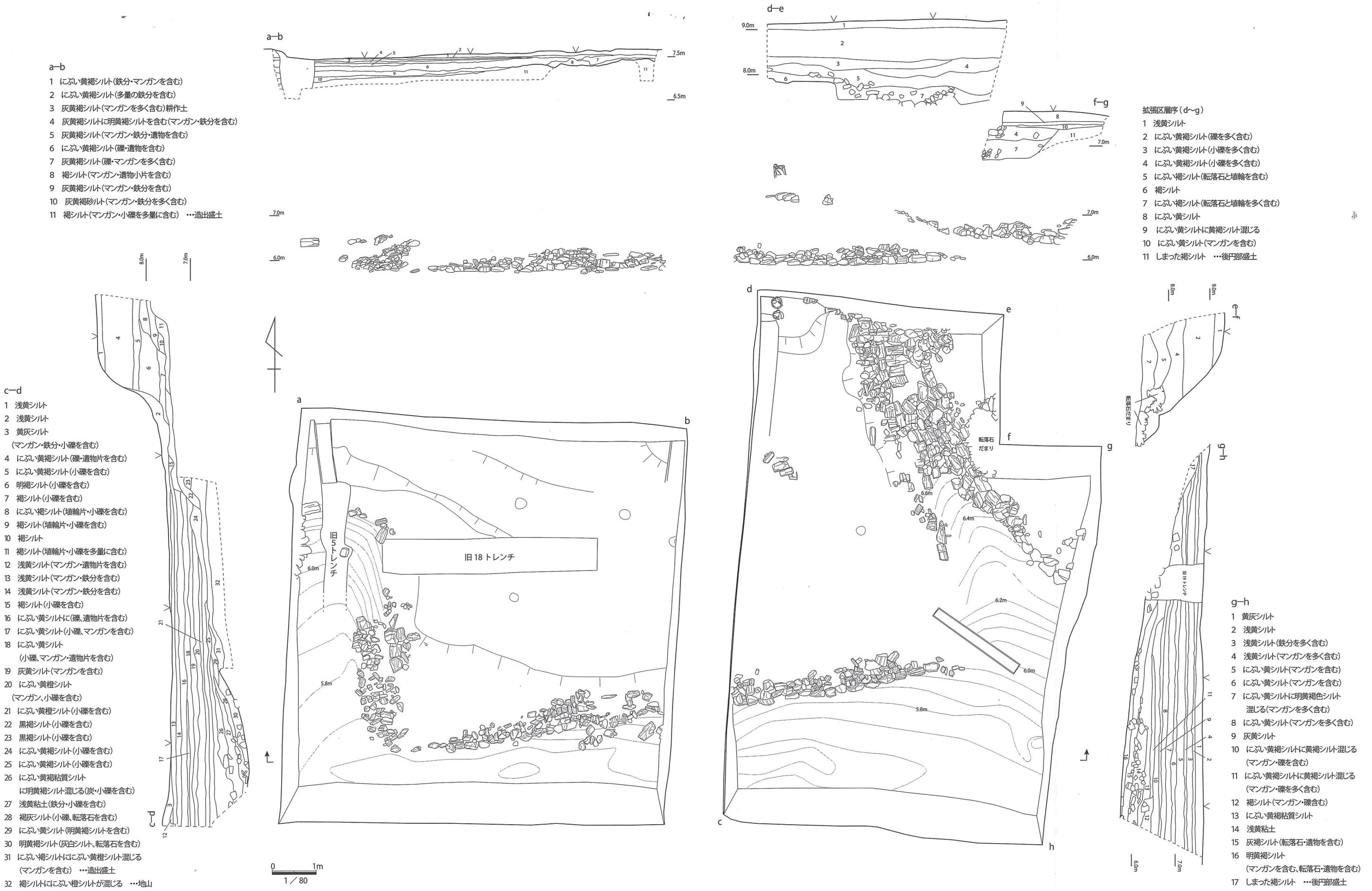


図9 造出調査区

た。周濠の底に粘土が堆積していないことなどから、築造当初は水性堆積のない空濠であった可能性が高いが、その後一時期は滯水していたようである。また、粘土層の上には水平な耕作土の堆積が何層か見られることから、周濠を人為的に埋め、造出墳丘を削り込むことで耕作地を広げようとしたと考えられる。この耕作土には古代～中世の土師器・須恵器の小片がわずかに含まれている。次章でも述べるが、周濠内や崩れた葺石の中からは円筒埴輪、船形埴輪や家形埴輪などの形象埴輪の破片や、複数の土師器壺や高杯、笊形土器が見つかっており、造出周辺ではこれらを使った祭祀が行われていた可能性がある。しかし、中央アゼ北東の平坦面で出土した樹立埴輪底部以外に築造当初の位置で見つかったものではなく、他の遺物に関しても部分的な破片が多いことや、離れた位置で出土した破片の接合事例があることなどから、ほとんどはすでに壊れた状態で周濠内に転落、もしくは故意に廃棄されたものであろう。

今回の調査では造出盛土上で複数のピットが検出されている。その性格は不明であるが、埋土には比較的新しい時期の耕作土の堆積や磨耗した埴輪細片が見られたことから、造出に関連する遺構である可能性は低いと考えられる。

第3章 出土遺物

平成25～28年度の調査では、コンテナ約35箱分の埴輪および土器片が出土した。そのほとんどが周濠や転落石中から出土した小破片で全体がわかる資料は少ない。このうち、埴輪および土器については今回比較的残りが良く、復元ができるものを中心に図化した。また、形象埴輪については器種および部位のわかるものを中心に図化した。

北側くびれ調査区 平成25年度には崩れた葺石や周濠の中から円筒埴輪および朝顔形埴輪の破片がコンテナ約10箱分出土した。周濠埋土の下層からは比較的大きな埴輪片が出土しており、古墳が荒廃し始めた頃にテラス部分から濠のなかへ転落した、もしくは故意に廃棄されたものであろう。平成26年度にはコンテナ約7箱の遺物が出土した。前年度と同様、ほとんどが円筒埴輪および朝顔形埴輪の破片であるが、蓋形埴輪や家形埴輪も出土している。周辺の地表面でも家形埴輪と考えられる破片を採取している。特に調査区の南側（墳丘側）の崩れた葺石中に多くの円筒埴輪片を含むが、どの個体も破損が著しく、転落石と一緒に故意に廃棄されたと考えられる。また、表土および表土下の明褐色層からは古代の土師器杯と中世の瓦器碗の底部と考えられる細片が出土している。

南側くびれ調査区 南側調査区では円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪、土師器高杯の破片がコンテナ約1箱分出土した。崩れた葺石に挟まるような形で埴輪片が出土しており、いずれも残存状態は良くない。形象埴輪については盾形埴輪、鞍形埴輪と考えられる破片を確認した。調査区の比較的上方で円筒埴輪や形象埴輪、高杯などの破片が出土していることから、いずれも墳頂付近に並べられていたものが転落したと考えられる。

後円部東側調査区 崩れた葺石からコンテナ約2箱の遺物が出土しており、ほとんどが古墳に伴う円筒埴輪および朝顔形埴輪の破片であるが、土師器片も数点出土している。いずれも原位置を保つて出土したものや完形品ではなく、耕作土や崩れた葺石内からの出土であったため、小さな破片が多い。また、周濠底の粘土層からは杭状の木片が出土したが、古墳に伴うものかどうかは不明である。

造出調査区 平成28年度の調査では、周濠内や崩れた葺石、後世の造成土の中から円筒埴輪、船形埴輪や家形埴輪などの形象埴輪の破片や、複数の小型丸底壺や高杯、押し型によって製作された筒形土器の破片などが出土した。調査区中央北側では造出面に樹立されていたと考えられる円筒埴輪底部2点（8・9）が出土している。原位置での出土はこの底部2点のみで、それ以外の遺物はほとんどが周濠内や転落石、後世の造成土からの破片での出土である。これらの遺物からは、造出に円筒埴輪列がめぐっていただけでなく、土器による食物供献や、周辺で形象埴輪を使った祭祀が行われていた可能性がある。船形埴輪は準構造船を模した舷側板やピボット部を含む船体の側面などの破片が出土している。

1 円筒埴輪（朝顔形埴輪）

1は円筒埴輪または朝顔形埴輪の体部～底部である。底部は径 17.4～19.3cm の楕円形で、残存高 28.7cm である。外面調整はタテハケのちヨコハケ、最下段はタテハケのみである。内面調整はナデで、下半に一部タテハケもしくは板ナデのような痕跡が見られる。内面には粘土紐を積み重ねた痕跡が明瞭に見受けられる。突帯は低い台形である。また、胎土は精良、器壁は 0.8cm と薄いことが特徴的である。

2は円筒埴輪の口縁～体部である。口径は 29.0cm に復元でき、残存高は 30.8cm である。外面調整はタテハケのちヨコハケ、内面には粘土紐を積み重ねた痕跡が見られるほか、調整はユビオサエとナデで口縁部付近にはヨコ、ナナメハケが見られる。円形の透かしが上から二段目に 2ヶ所穿たれている。最上段には弓状のヘラ記号が刻まれている。

3は円筒埴輪の口縁部～底部である。口径は 27.0cm、底部径 16.6cm、残存高 58.0cm、厚さ 1.15cm である。三条四段で、上から二段目に円形の透かしが穿たれている。外面調整はタテハケのち静止痕のあるヨコハケのち一部にナデ、内面調整はオサエのちナデで、底部付近は斜め方向のケズリのような痕跡が見られる。底部内面には粘土紐を積み重ねた痕跡が見られる。突帯は細く高い台形で、口縁部はまっすぐで先端を折り曲げる。

4は、ほぼ完形の円筒埴輪である。口径 26.9cm、底部径 19.05 cm、高さは 49.8cm である。三条四段で、上から二段目に綾杉文が刻まれており、上から二段目に 2ヶ所と三段目に 1ヶ所の円形透かしが穿たれているほか、外面には黒斑が見られる。口縁は外反し四角くおさめ、端部内面には稜を持つ。外面調整はタテハケ、一部にタテハケのちナデ、内面調整は縦方向と横方向のナデが主である。突帯は細く高い長方形で、貼り付け痕跡が明瞭である。底部はやや裾広がりのスカート状である。器壁は 1.0～1.5 cm と他個体に比べて厚いことが特徴的である。

5は円筒埴輪の体部～底部の破片である。底部径は 20cm に復元でき、残存高は 47.8cm である。三条四段で、下から二段目と三段目に円形の透かしが 1ヶ所ずつ穿たれている。突帯は台形である。外面調整はタテハケのちナデ、ヨコハケのちナデである。内面調整は口縁部付近にはナデのちヨコハケ、それ以外はオサエや縦方向のナデが見られる。

6は円筒埴輪の口縁部である。口径は 32.0cm に復元でき、残存高は 13.5cm、厚さ 0.6～1.7cm である。器壁は比較的薄く、胎土は精良。口縁は端部に向かって緩やかに外反しつつ比較的まっすぐに伸びる。外面調整はタテハケのちヨコハケで、内面は口縁部付近にのみヨコハケが施されており、他はヨコナデである。

7は、円筒埴輪の口縁～体部である。復元径 28.8cm、残存高 22.5cm である。上から二段目に円形の透かしが穿たれる。外面調整はヨコハケのちナナメハケ、内面は一部にハケメが見られるがナデである。内面には粘土紐を積み重ねた接合痕が見られる。最上段には斜め V 字状のヘラ記号が刻まれている。

8は円筒埴輪または朝顔形埴輪の体部～底部である。底部径は 19.0cm、残存高は 23.0cm である。

内外面ともに表面は磨耗しているが、外面の一部にタテハケ、内面はナデおよびヨコハケが残る。内面には粘土紐を積み重ねた痕跡が明瞭に見受けられる。最下段突帯から底部までが 19cm であることから、過去の調査でも確認されている二条三段の埴輪であると考えられる。

9 は円筒埴輪または朝顔形埴輪の体部～底部である。底部径は 18.0cm、残存高は 20.7cm である。外面調整はタテハケのちヨコハケ、内面調整はユビオサエやナデが施されている。内面には粘土紐を積み重ねた痕跡が明瞭に見受けられる。最下段突帯から底部までが 18.5cm であることから、二条三段の埴輪であると考えられる。また、近接した場所で胎土や調整が近似した朝顔形埴輪の肩部の破片が出土していることから朝顔形埴輪の可能性がある。

2 土師器

10～13 は笊形土器である。10 はほぼ完形品であり、高さ 3.0cm、口径 11.9cm、底径 3.8cm である。11 は口縁～底部の破片で、高さ 3.6cm、復元径 12.9cm、底径 3.1cm である。12 は口縁部の破片で、復元径 12.5cm、残存高 2.9cm である。外面の笊目は磨耗のためはつきりしない。13 は口縁部～底部の破片で、高さ 3.5cm、口径 12.8cm である。底部の笊目は磨耗しはつきりしない。いずれも内外面ともに笊の圧痕が見られ、押し型による成形土器である。特に 10 は底部に笊底の四隅の編み目も明瞭に確認することができる。図化した他にも笊型土器と考えられる小破片が複数個出土している。

14 は高杯の杯部の破片である。復元径 15.0cm、残存高 6.0cm、器厚 0.2～1.0cm である。杯部は外面に稜をもちながら外反する形態で、内外面にうっすらと赤彩が残存している。脚部との接合部付近には剥離面が見られる。内面調整はヨコナデで、表面はなめらかに仕上げられている。外面調整は磨耗のため不明である。15 は小型の高杯である。残存高 6.2cm、口径 11.1cm、器厚 1.2～1.6cm である。杯部は丸い椀型で稜はない。脚部は内部が空洞の円柱状である。調整は内外面ともに磨耗が著しいが、脚部には外面に横方向の粘土紐接合痕があるほか、内面にはしぶり痕のような縦方向の痕跡が見られる。今回図化した以外にも小型の高杯の杯や脚と考えられる破片が複数個出土している。

16～21 は土師器壺である。個体によって器形や頸部の大きさが少しずつ異なっている。16 は高さ 5.6cm、口径 5.45cm、胴部径 6.8cm、17 は残存高 5.15cm、頸部径 4.4cm、胴部径 6.5cm、18 は高さ 5.8cm、口径 5.2cm、胴部径 6.3cm、19 は残存高 5.9cm、頸部径 4.8cm、胴部径 7.0cm、20 は高さ 6.3cm、口径 5.6cm、胴部径 7.0cm、21 は残存高 5.0cm、頸部径 4.4cm、胴部径 6.8cm である。いずれも表面の磨耗が著しいが、内面に縦方向の板状工具の痕跡が見られるほか、外面はナデ調整である。図化した以外にも同様の小型の土師器壺の破片が同調査区内で複数個出土している。

3 形象埴輪

22 は家形埴輪の破片である。残存高 9.3cm、残存幅 23cm で家の軸部である。高さ 3.0~3.2 cm の長方形の裾廻り突帯がめぐり、窓の表現と考えられる長方形の透かしが確認できる。外面には細かいタテハケによる調整が施される。内面は磨耗が著しく調整はわかりづらいが、突帯が剥離した部分や突帯接合時のヨコナデなどが確認できる。

23 は家形埴輪の破片である。家の切妻破風板の一部であると考えられる。傾きは不明であるが、平置時の残存高は 8.9cm、残存幅 18.7cm、厚さ 0.9~1.4cm で、調整は磨耗のため内外面ともに不明である。

24 は鞍形埴輪の破片である。残存高 9.6cm、残存幅 10.1cm、厚さ 0.8~2.1cm で表面には円弧文の一部が線刻で刻まれている。裏面は磨耗のため調整は不明である。

25 は盾形埴輪の破片である。残存高 10.9cm、残存幅 9.9cm、厚さ 1.1~2.1cm で表面にはタテハケのうち、線刻で鋸歯文が刻まれている。裏面にはナデおよびケズリと考えられる調整が施されている。

26 は器種不明埴輪の破片である。天地不明で、縦 15.1cm、横 6.6cm、厚さ 1.7cm の直線的な形状の破片で、外面に線刻が見られる。内外面ともに磨滅が著しく調整は不明であるが、内面には粘土紐による接合痕が見られる。鞍や甲冑形埴輪等の可能性がある。

27~33 は船形埴輪の破片である。27、28 は二股タイプの船形埴輪の丸木の船底部先端と考えられる。27 は残存幅 11.3cm、残存高 6.3cm、28 は残存幅 9.6cm、残存高 5.3cm である。いずれも内面は空洞で黒色化しており、外面にはハケメによる調整が施されている。29、30 は舷側版の一部であり 29 は残存高 9.3cm、残存幅 10cm、厚さ 1.5cm、30 は残存高 10cm、残存幅 10.9cm、厚さ 1.5cm である。いずれも横木部分は剥離しているが接合痕が黒色化している。特に 29 の内側には横木を貼り付ける際の刻み目状の痕跡が見られる。両面にハケメによる調整が施される。同様の破片が史跡指定以前の調査でも造出部付近で出土している。31 は残存高 7.7cm、残存幅 22.9cm、厚さ 1.3cm の船体の一部で、上方には高さ 0.7~1.0cm、幅 2.0~2.3cm のピボットが 3箇所に残る。32 は残存高 13.6cm、残存幅 34.5cm、厚さ 1.0~1.5cm の船体の一部で、高さ 1.2cm、幅 2.5cm のピボットがある。ピボットの下部には幅 1.3~1.5cm、高さ 0.3cm の低い台形の突帯が巡り、内側にも高さ 1.5cm の三角~台形の突帯がある。船体部はいずれも外面にはナデとヨコハケ、内面にはケズリとタテハケが施され、焼成は良好である。33 は残存幅 6.7cm、残存高 3.3cm、厚さ 1.0 cm で船の障壁の可能性がある破片である。内外面はハケメ調整が見られる。

4 小結

円筒埴輪の口径は 25~30cm 前後、底径は 20cm 前後のものが中心である。器厚については厚い

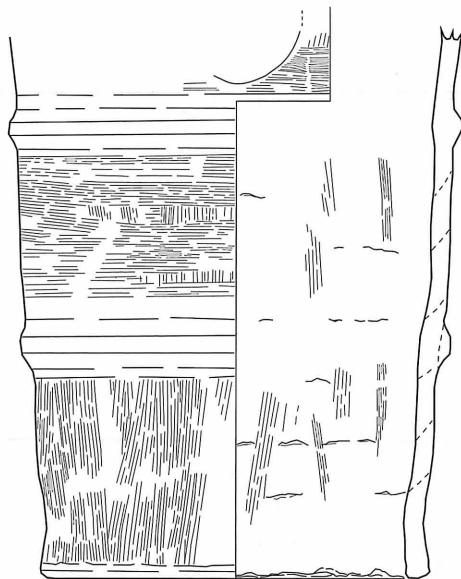
個体と薄い個体の2種類が見られる。口縁部形状については外反し端部に面をもつもの、逆L字状のもの、直立するものなど複数種類が確認できた。突帯形状は台形のものとM字に近いものが見られるが、台形が多い。台形突帯は低いものと高いものがある。突帯間隔はほぼ同じであるが、設定技法等についてはよくわからない。透かし穴はすべて円形で、上から二段目と三段目に穿孔するものが多いが、穿孔位置や数は個体によって異なる。

埴輪の外面調整はタテハケのちB種ヨコハケ、タテハケのみの個体が見られる。B種ヨコハケについては、はつきりとした静止痕は少ない。不連続に静止しているように見え、その幅は一定ではない。また、口縁部には長いストロークのナナメハケが見られる。内面調整は指ナデとオサエ、一部にナナメハケが見られる。色調は黄橙系が多く、円筒埴輪の大半に黒斑が認められる。

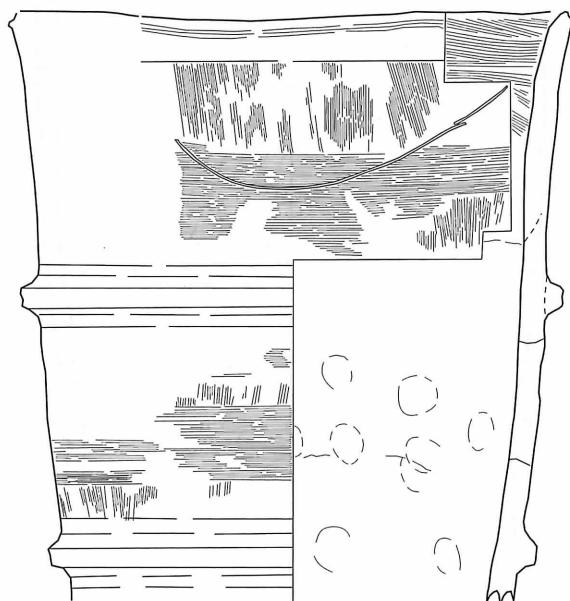
ヘラ記号は以前の調査では10種以上が確認されており、今回も円弧をベースにした組み合わせを中心に、斜めV字状のものなどが見られた。また、ヘラ記号ではないかもしれないが、方形の中に綾杉文を刻んだ円筒埴輪が出土している。その他、赤色顔料が塗装されている埴輪や土師器も前回と同様複数確認できた。

造出周辺における祭祀の状況を復元するためにも、遺物の出土位置は重要な手掛かりになってくる。本調査では、家形埴輪が造出西側の周濠内から、船形埴輪と笊形土器が造出東側の周濠内を中心に出土しているという傾向には注目できる。ただし、調査区内の離れた部分での接合個体も確認されていることから、かなり破損が進んだ状態で周濠内に転落、もしくは廃棄されたことがわかるため、樹立位置の特定は難しい。土師器の小型壺に関しては、周濠内だけでなく、北東側の拡張部からも出土している。

出土遺物に関する情報の多くは、多くはこれまでの調査成果を踏襲するものであるが、本調査では、これまで確認されていなかった笊形土器が複数点出土したことや、船形埴輪の資料が増えたことなどが大きな成果と言える。これまでの出土資料も含めた埴輪の傾向分析や他地域との比較が今後の課題である。



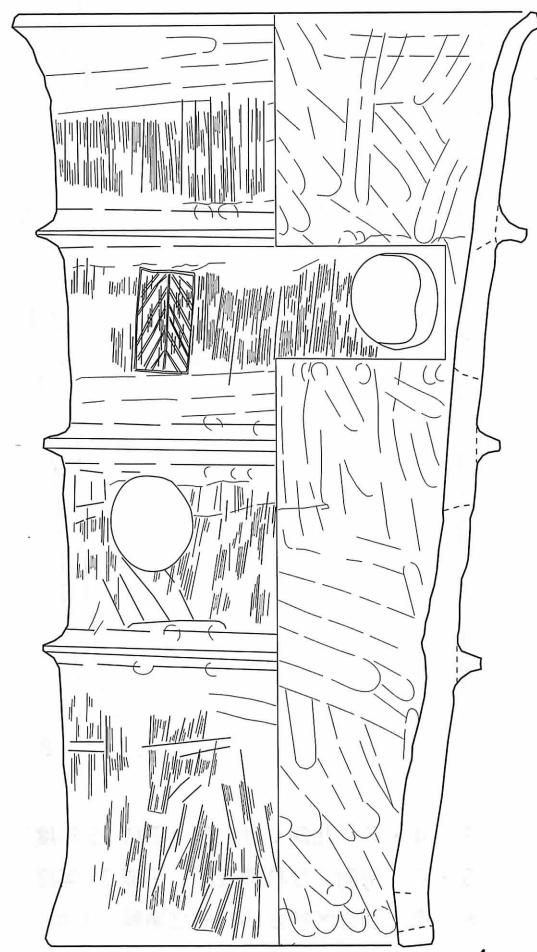
1



2



3

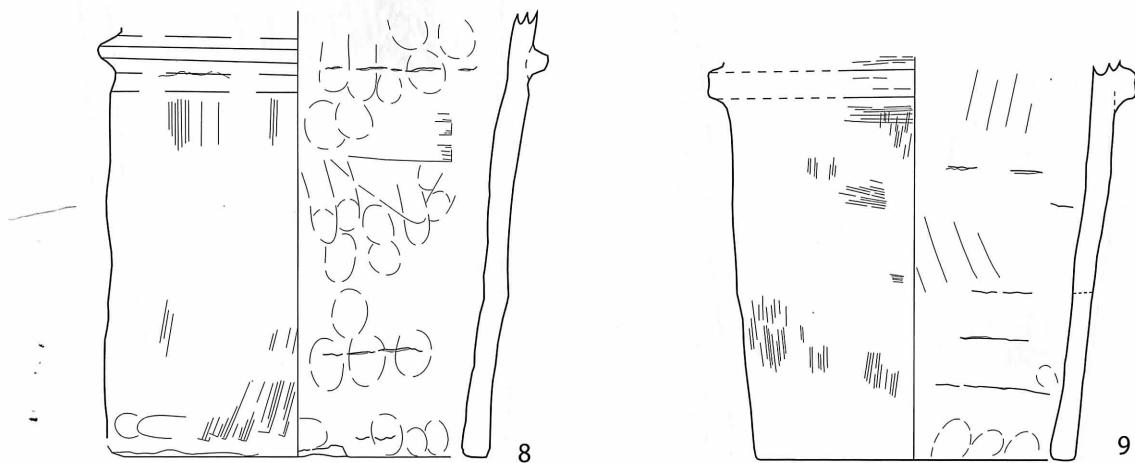
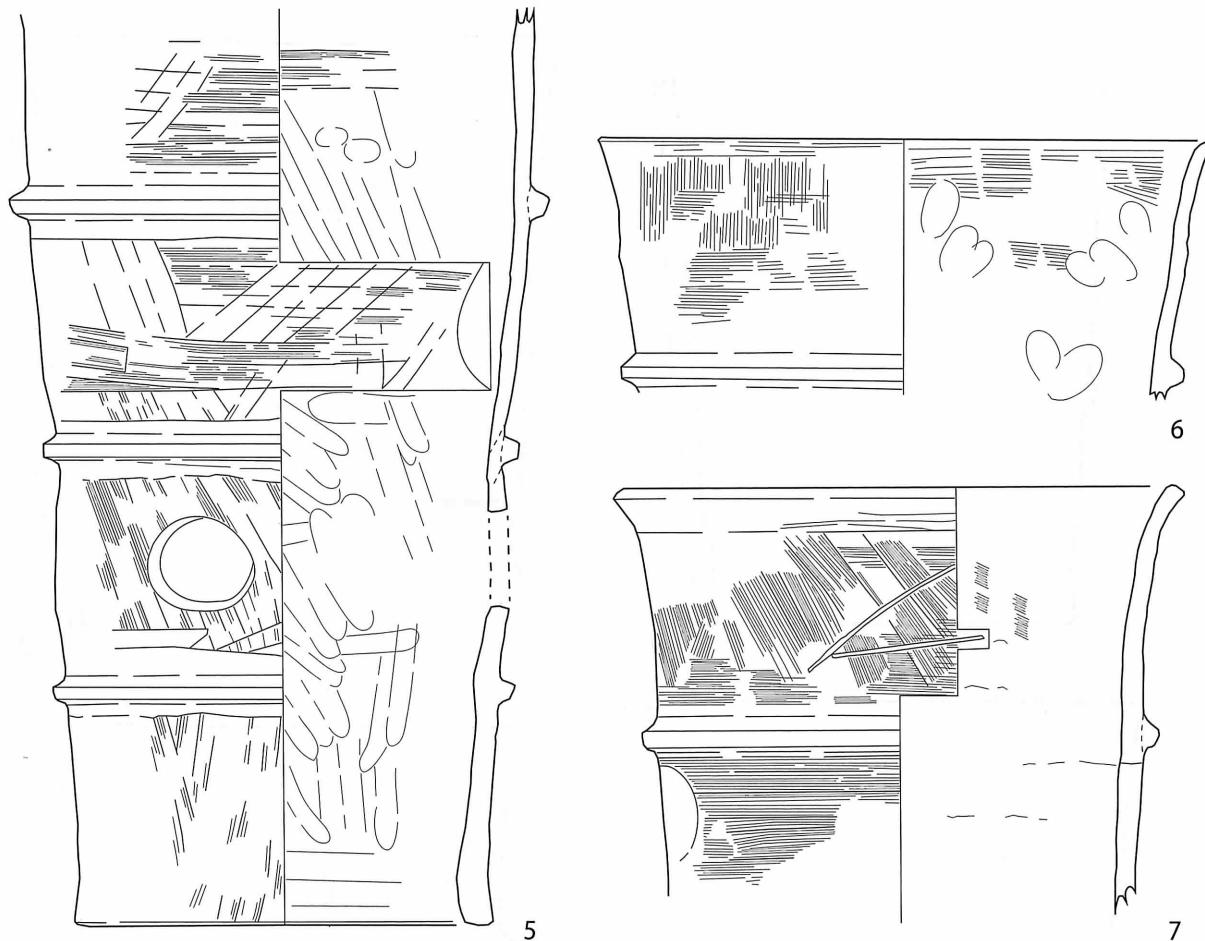


4



(S = 1/4)

円筒埴輪（朝顔形埴輪）



1～4・7 北側くびれ部（平成 25 年度）

5・6 南側くびれ調査区（平成 25 年度）

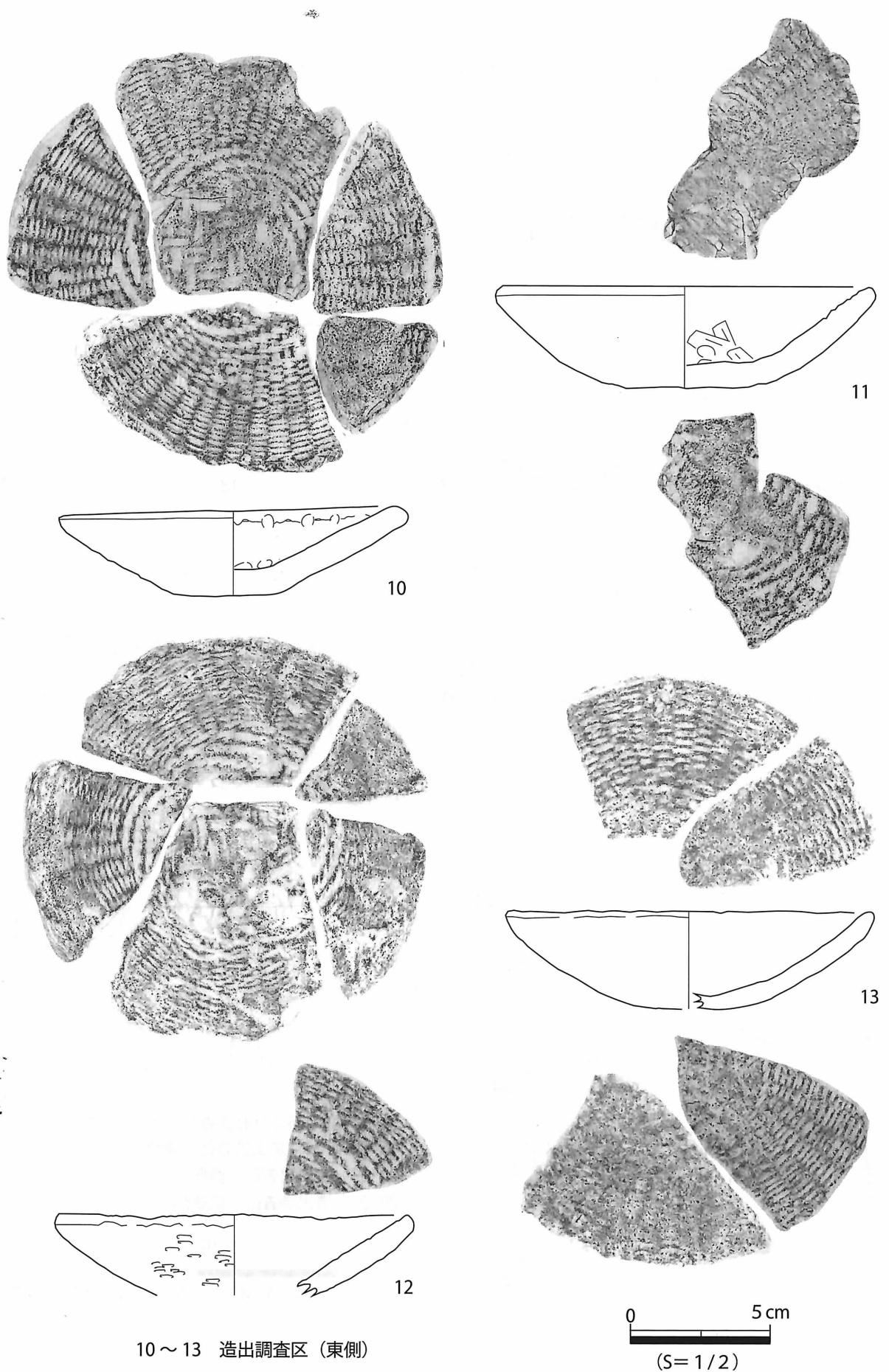
8 造出調査区拡張部 樹立埴輪（北側）

9 造出調査区拡張部 樹立埴輪（南側）

0 10cm

(S = 1/4)

図 11 円筒埴輪（朝顔形埴輪）



10～13 造出調査区（東側）

図 12 土師器

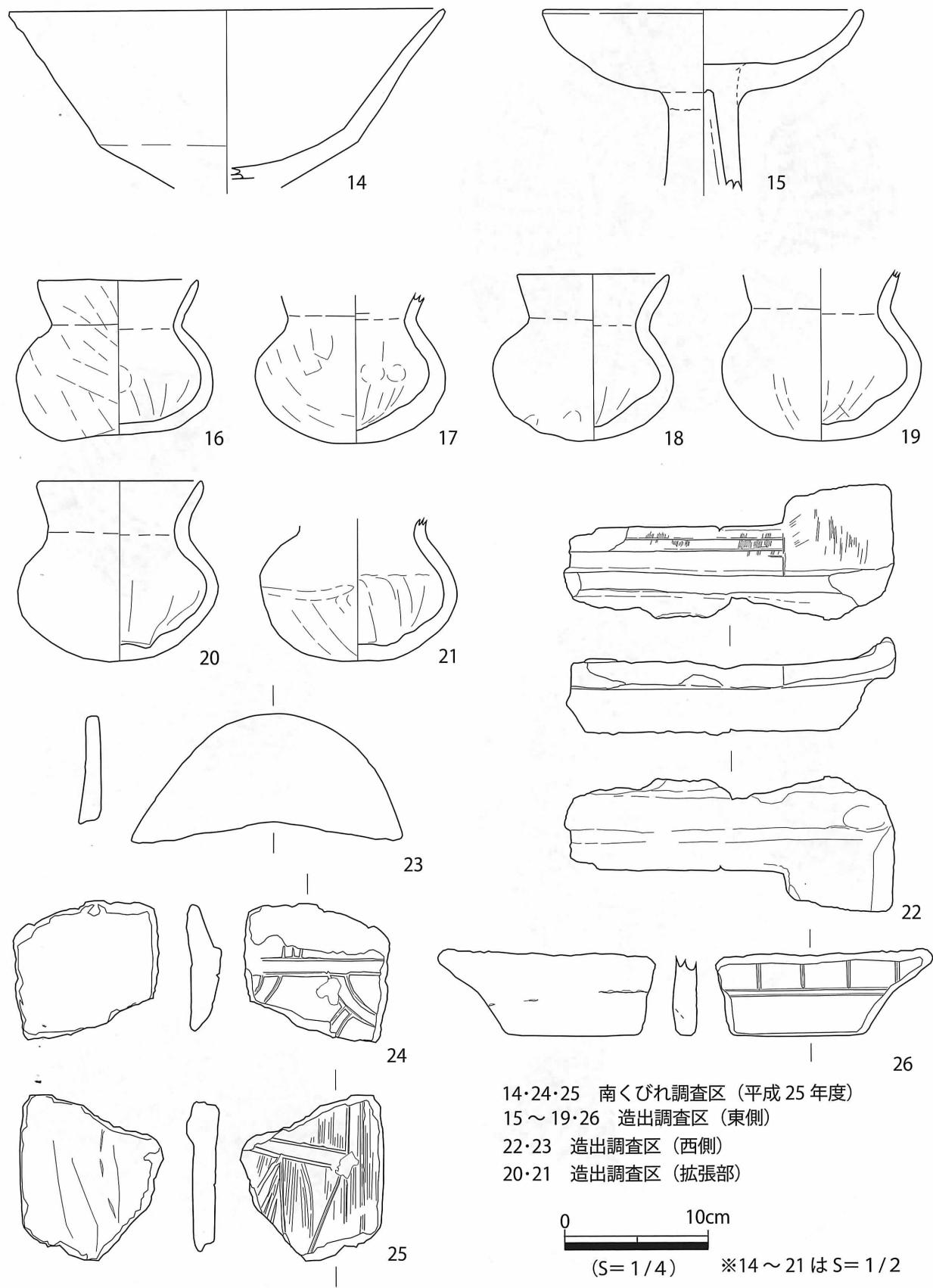


図 13 土師器・形象埴輪

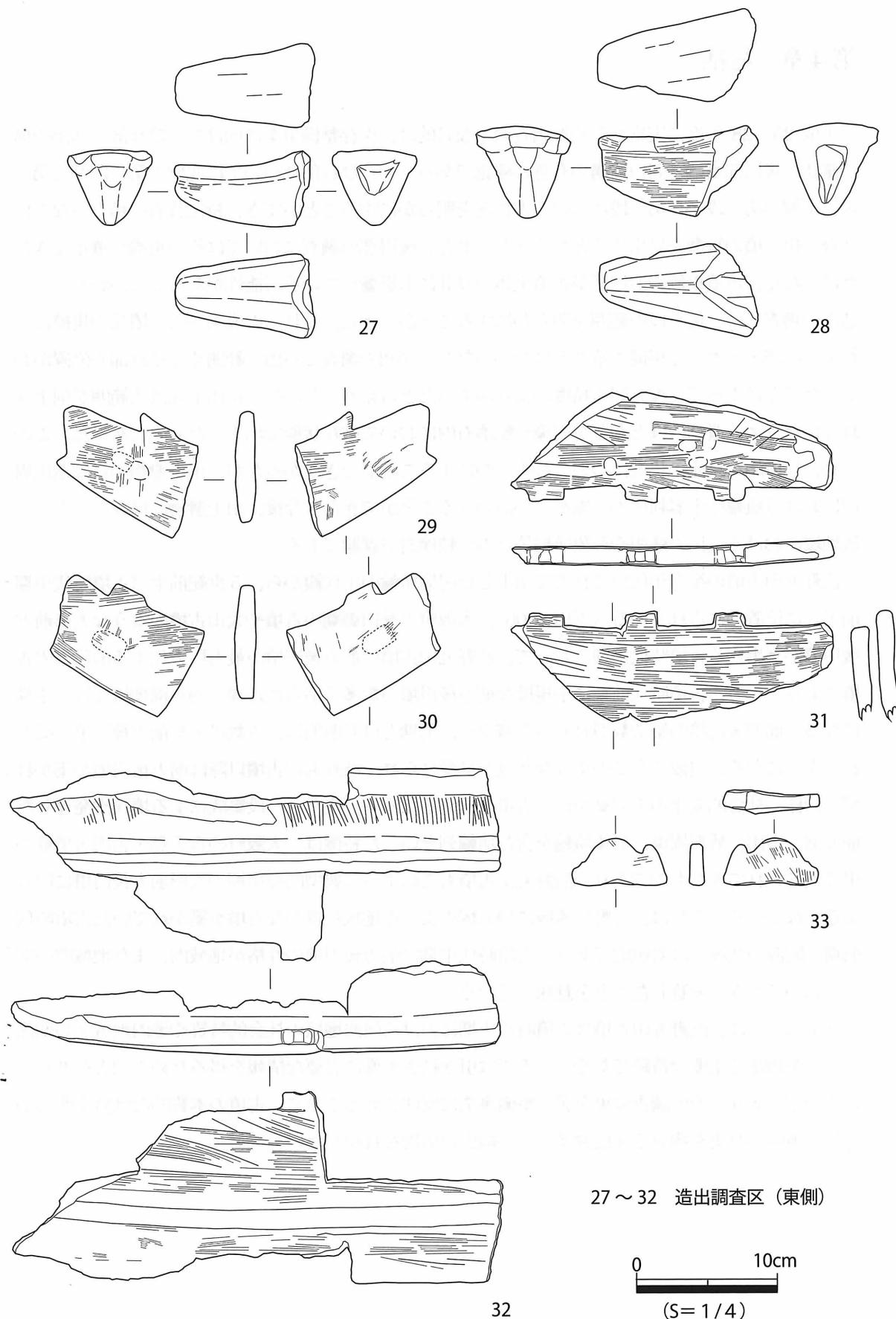


図 14 形象埴輪

第4章 総括

平成25～28年度に実施した発掘調査の主な目的は、保存整備事業に向けたくびれ部、造出の構造確認、後円部墳端と周辺遺構の有無の確認であった。くびれ部については北側の第一段から第二段、南側の第二段から第三段についての状況を明らかにすることができ、特に葺石の積み方などは渋野丸山古墳の特徴を見出すことができた。また、後円部の調査においてはその東端が確定できただけでなく、古墳東側の旧地形が古墳全体の設計にも影響している可能性があることがわかった。造出の調査では、最下段の範囲を明らかにすることができた。これらの成果から、墳丘の規模はこれまでの想定と大きく相違することはなかったが、今回の調査で造出の範囲やくびれ部の位置がわかったことによって、復元図の精度がより高まったと言える。しかし、造出上面は広範囲が削平されていたうえ、遺物のほとんどが周濠や転落石内において破片状態で出土したものであった。このため、具体的な祭祀の状況については明らかにすることができなかつたが、出土遺物からは造出周辺における埴輪や土器利用の一端をうかがい知ることができた。今後、出土遺物の精査とともに、他地域における造出の様相や形象埴輪等との比較検討が課題である。

渋野丸山古墳の築造年代はこれまで出土した円筒埴輪の年代観から、5世紀前半（古墳時代中期前半）に位置づけられている（下田2006）。大阪府の誉田御廟山古墳や大山古墳のような大形前方後円墳が登場する古墳時代中期において、渋野丸山古墳は前方後円墳が最も巨大化する前段階の古墳である。一方、古墳時代前期に小規模な前方後円墳が数多く造られた瀬戸内東部地域では、中期になると前方後円墳の築造数が目立って減少し、前期とは対照的に、少数の大形前方後円墳が築かれるようになる。阿波でもこのような状況が見受けられ、渋野丸山古墳以降は前方後円墳が築かれず、同様の社会的変化の中で築かれた古墳と言えるだろう。また、三段築成による墳丘や発達した前方部、造出、盾形周濠、形象埴輪を含む埴輪列といった特徴は、大阪府の百舌鳥・古市古墳群の中で整備されてきたものであり、渋野丸山古墳もこのような典型的な中期の大形前方後円墳に則つて造られている。これは、吉野川流域に積石塚のような地域色豊かな古墳が築かれていた古墳時代前期の阿波の状況とは対照的であり。古墳時代中期に前方後円墳の性格が地域内、また地域間の関係において大きく変質したことを意味している。

以上のように、渋野丸山古墳は古墳時代中期における阿波地域の社会的特質や畿内地域との関係の変容を物語る重要な遺跡である。当市では引き続き整備に必要な情報を得るために調査を進めていく予定であり、その調査成果を保存整備事業に反映させることで、古墳の本質的な価値を明らかにし、地域の歴史を物語る文化遺産として幅広い活用を目指したい。

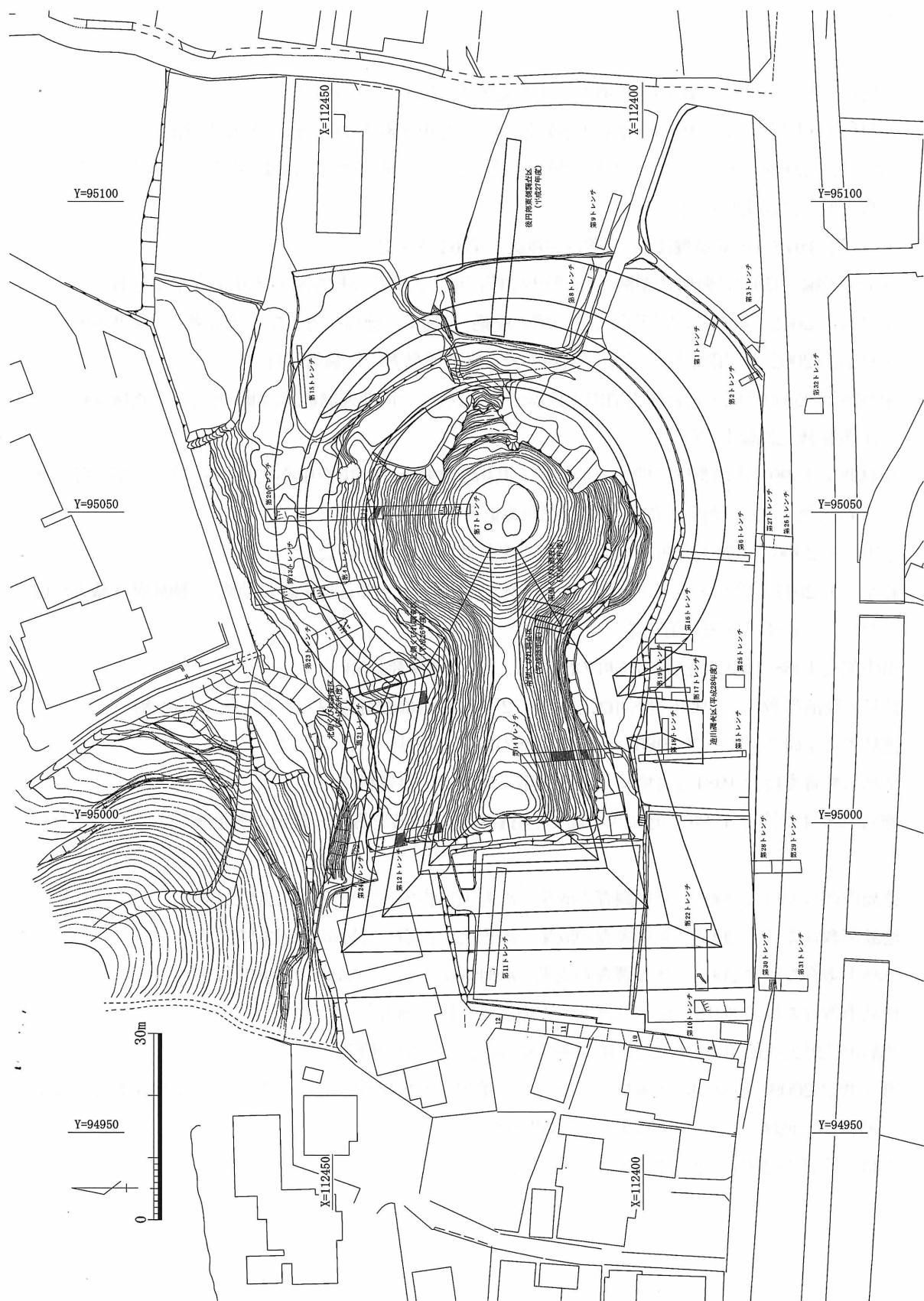


図15 墳丘復元図

参考文献

- 天羽利夫・岡山真知子 1973 「古墳の発生と変遷」『徳島市史』第1巻
- 天羽利夫・岡山真知子 1985 『徳島の遺跡散歩』徳島市民双書19 徳島市立図書館
- 河内一浩 2009 「阿波における石見型埴輪の受容」『一山典還暦記念論集 考古学と地域文化』一山
典還暦記念論集刊行会
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- 日下敏夫編 1973 「渋野町の遺跡」『渋野小学校百年』渋野小学校創立百周年記念事業協賛会
- 栗林誠治 2002 「阿波における前方後円墳の廃絶」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会
- 栗林誠治 2002 「古墳時代」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会
- 栗林誠治 2009 「伝・新宮塚古墳出土鉄器の再検討」『一山典還暦記念論集 考古学と地域文化』一
山典還暦記念論集刊行会
- 小林勝美 1999 「古墳整備に関する一試案—県指定渋野丸山古墳を中心にして—」『三好昭一郎先生
古希記念論集』三好昭一郎先生古希記念論集刊行委員会
- 下田順一 2006 『渋野丸山古墳発掘調査報告書』徳島市教育委員会
- 菅原康夫 2011 「鳴門・板野古墳群の特質と阿波古墳時代前期首長系譜の動態」『徳島県埋蔵文化財
センター紀要 真朱』第9号
- 田中英夫 1968 「徳島市渋野古墳群の出土品」『古代学研究』53号
- 徳島県勝浦郡教育会 1923 『勝浦郡志』(1972年に勝浦郡教育会編で名著出版より再版)
- 徳島考古学研究グループ 1985 「渋野古墳群の研究」『徳島考古』第2号
- 徳島市教育委員会 1981 『古墳時代の徳島市—埋蔵文化財資料展—』
- 徳島市教育委員会 1988 『第9回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る—最近の発掘調査と古墳の副葬品
—』
- 徳島市教育委員会 2001 「発掘調査の成果 渋野丸山古墳」『徳島市文化財だより』
- 徳島市教育委員会 2005 「発掘調査の成果 渋野丸山古墳」『徳島市文化財だより』
- 徳島市教育委員会 2006 「発掘調査の成果 渋野丸山古墳」『徳島市文化財だより』
- 徳島市教育委員会 2012 『史跡渋野丸山古墳保存管理計画書』
- 徳島市渋野公民館 1952 『渋野古墳保勝会結成記念 古墳の研究』
- 藤川智之 2009 「最盛期の埴輪群—渋野丸山古墳出土形象埴輪をめぐって—」『一山典還暦記念論集
考古学と地域文化』一山典還暦記念論集刊行会
- 北條芳隆ほか 2007 『徳島県の歴史』山川出版社

写 真 図 版

図版 1



1 平成 25 年度南側くびれ調査区（北から）



2 平成 25 年度南側くびれ調査区（南西から）

図版2



1 平成 26 年度南側くびれ調査区（北西から）



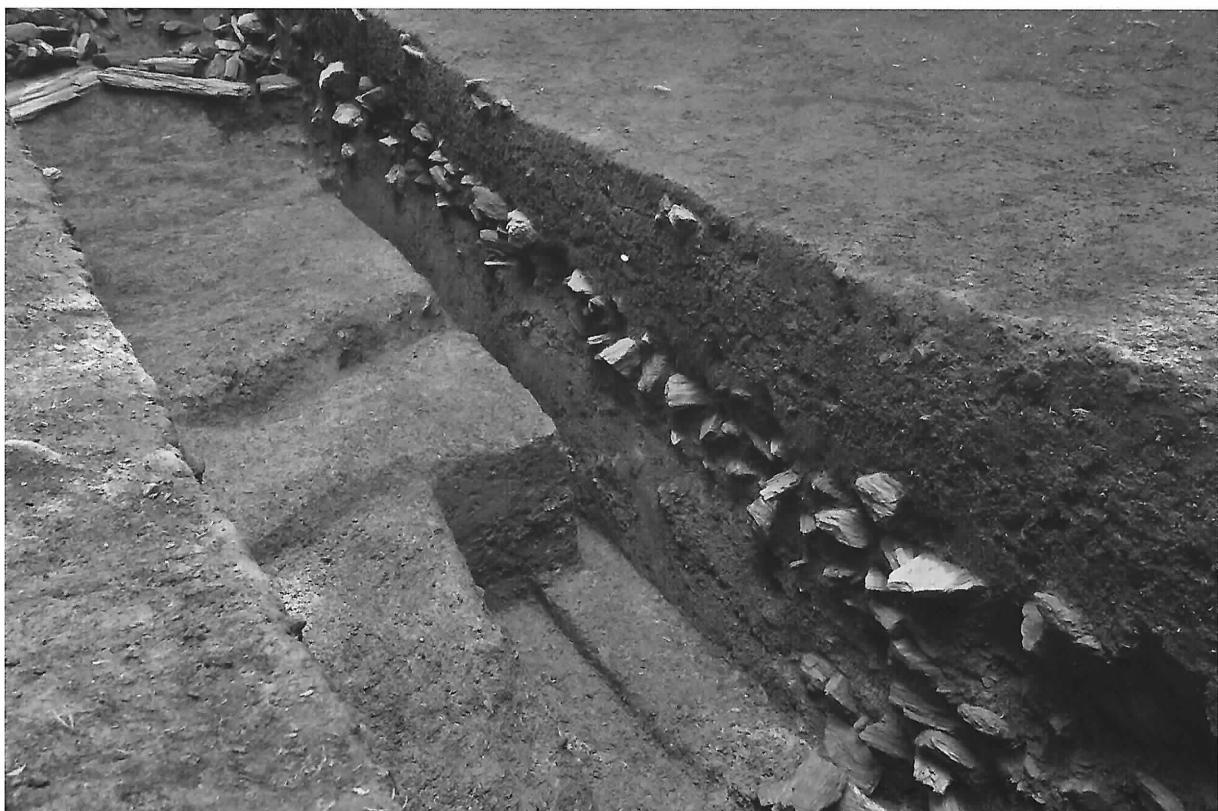
2 平成 25 年度南側くびれ調査区
(北から)



3 平成 26 年度南側くびれ調査区全景
(北から)



1 平成 26 年度北側くびれ調査区（北東から）



2 平成 26 年度北側くびれ調査区西壁

図版4



1 後円部東側調査区西側（東から）



2 後円部東側調査区東側（北西から）

図版5



1 造出調査区西側（南西から）



2 造出調査区東側（南東から）

図版6



1 造出調査区全景（南から）



2 造出調査区拡張部（北東から）

図版 7

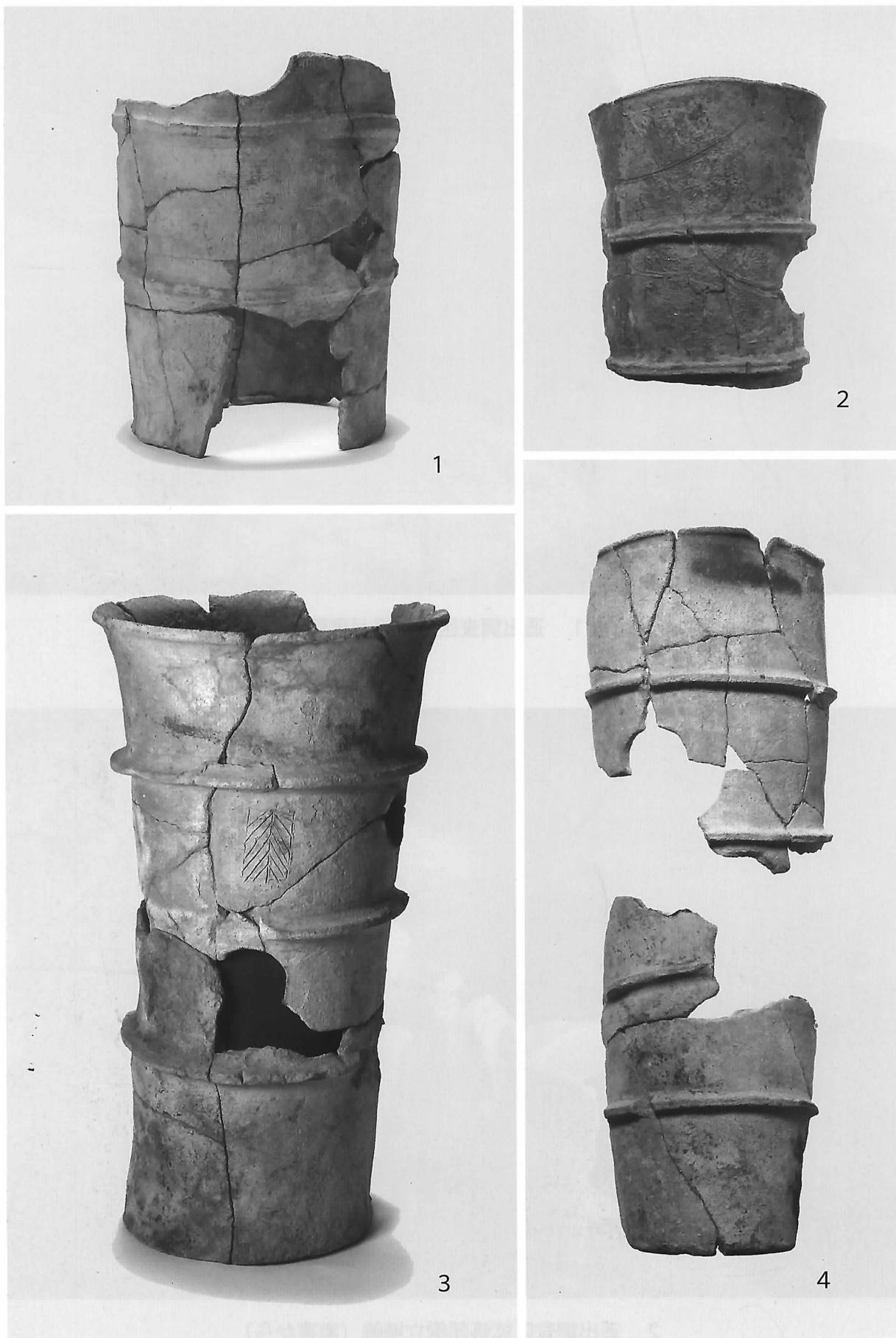


1 造出調査区中央アゼ東壁



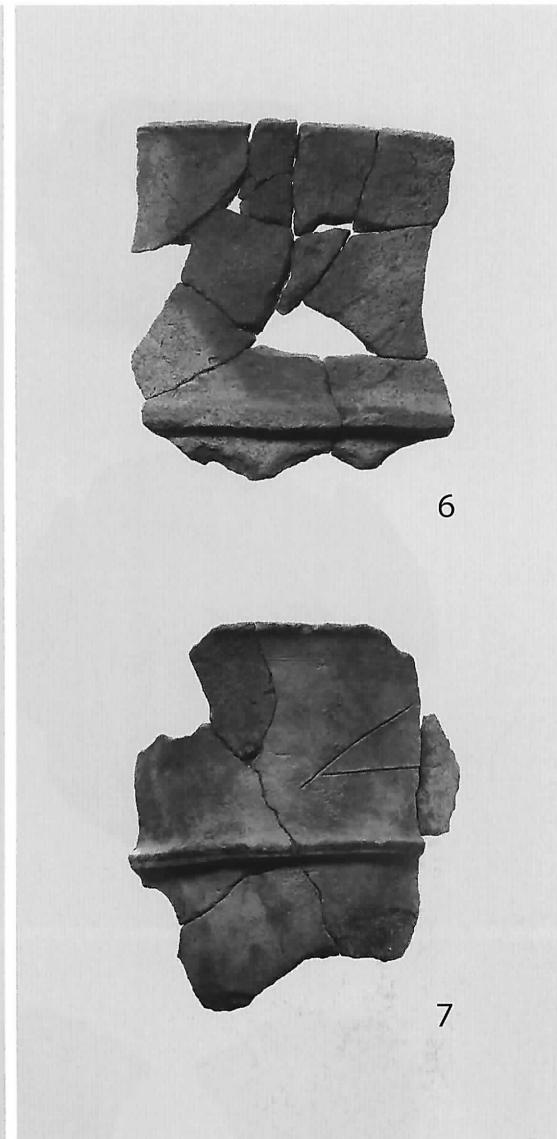
2 造出調査区拡張部樹立埴輪（南東から）

図版8



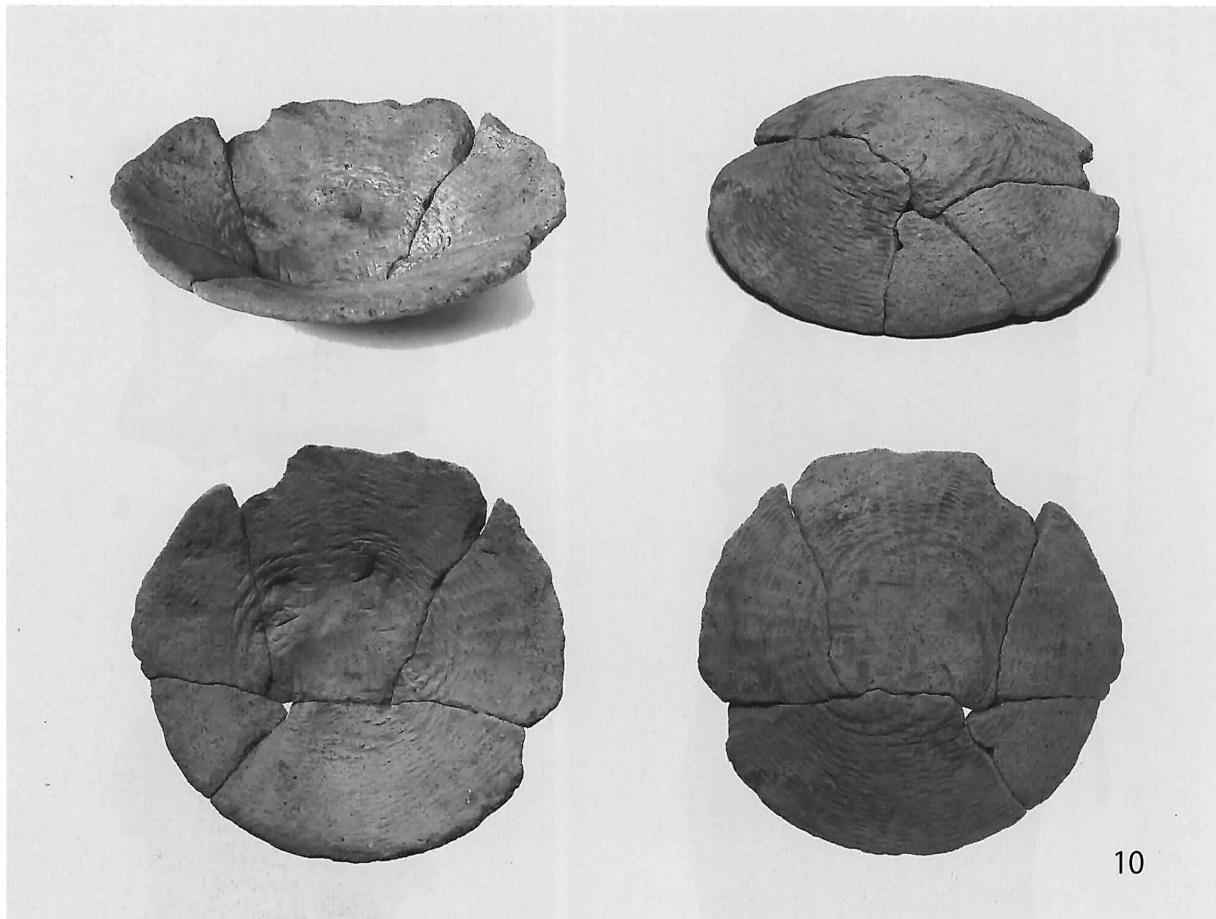
円筒埴輪（朝顔形埴輪）

図版9

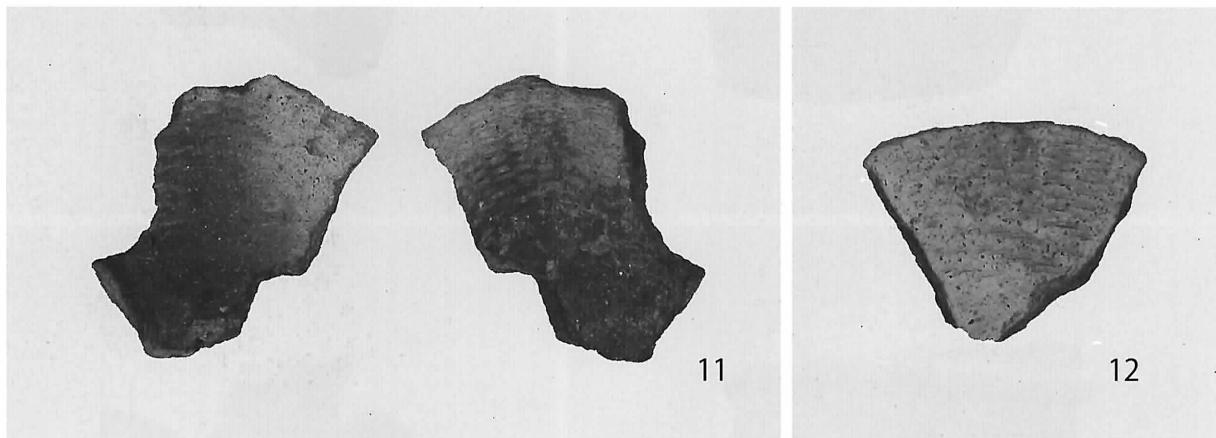


円筒埴輪（朝顔形埴輪）

図版10

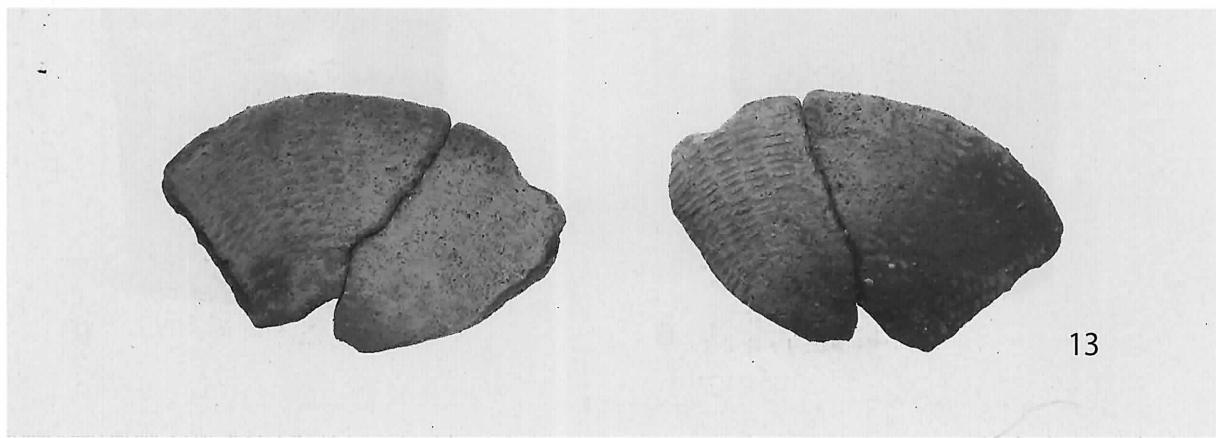


10



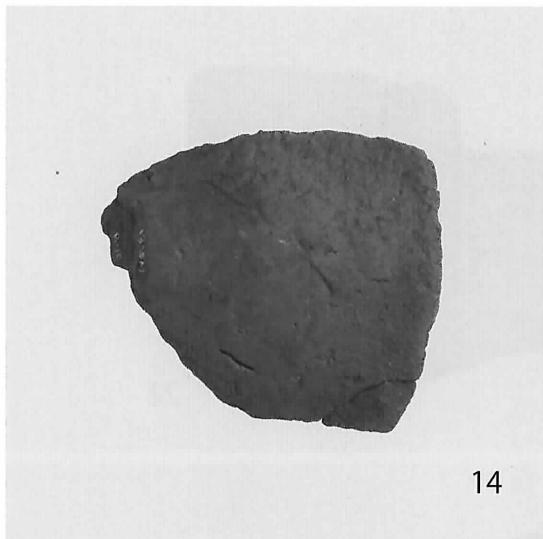
11

12



13

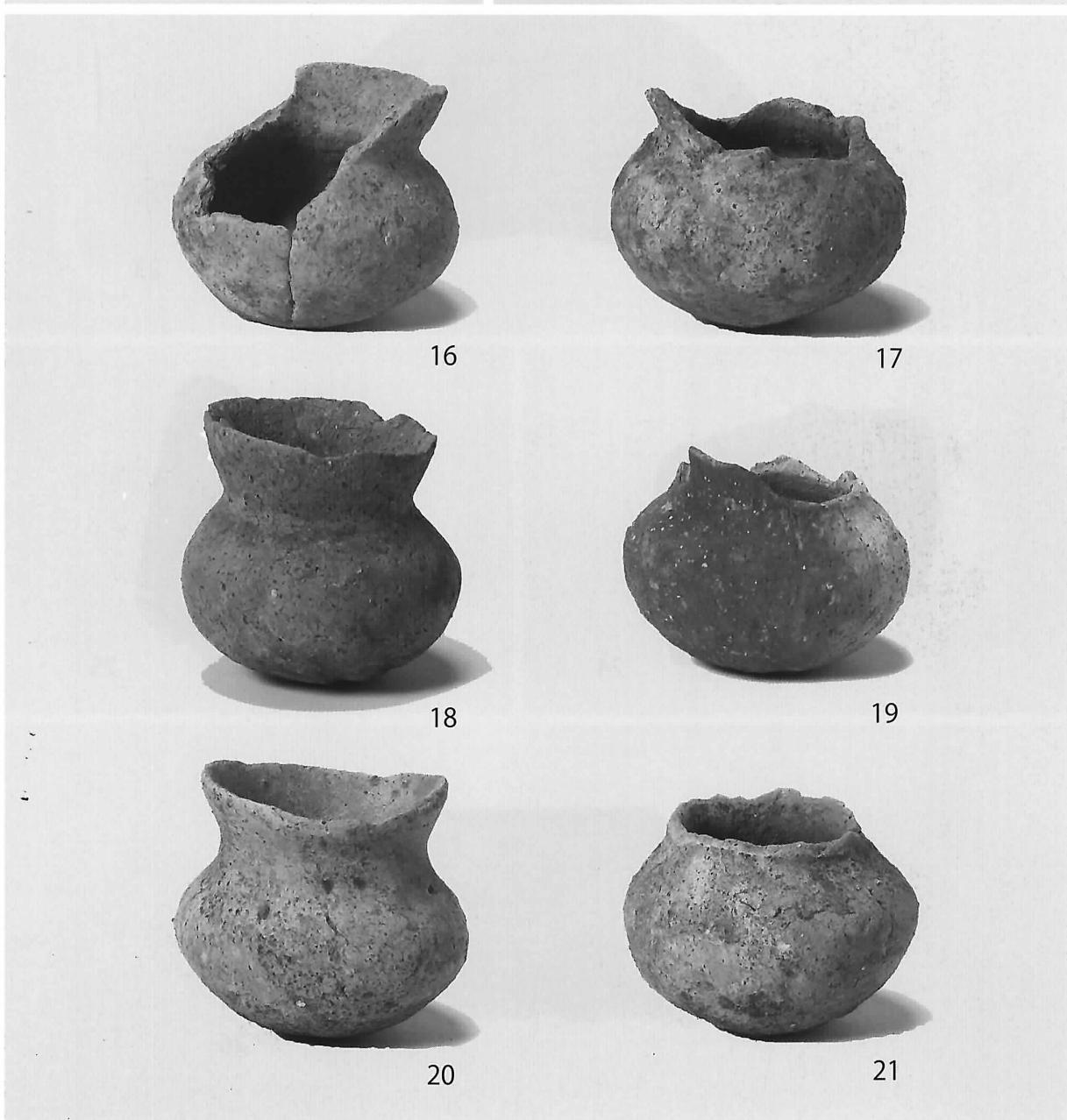
土師器（笊形土器）



14



15

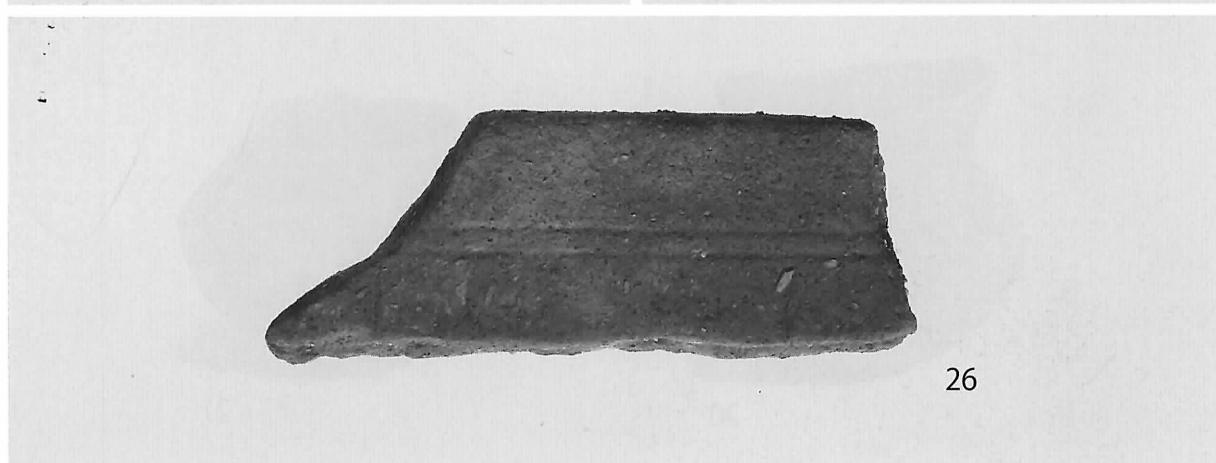
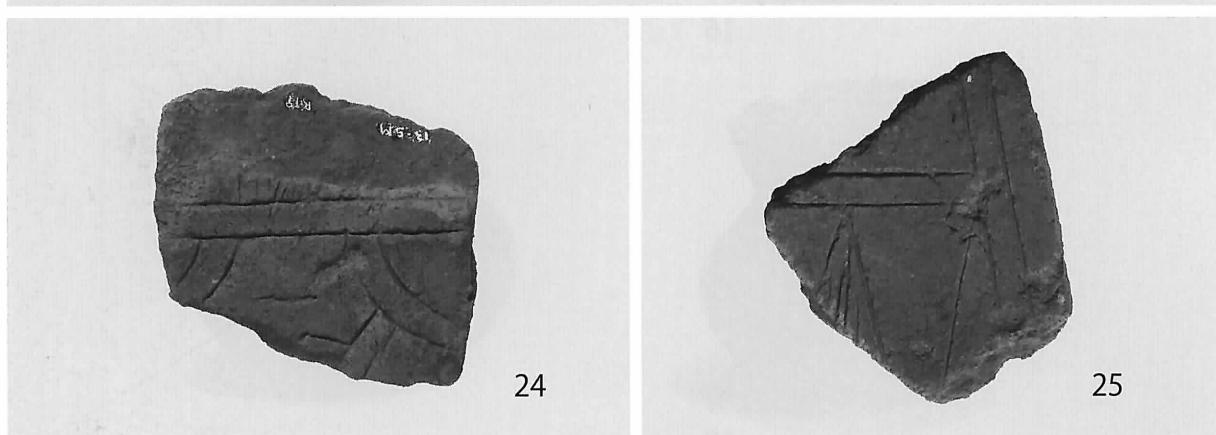
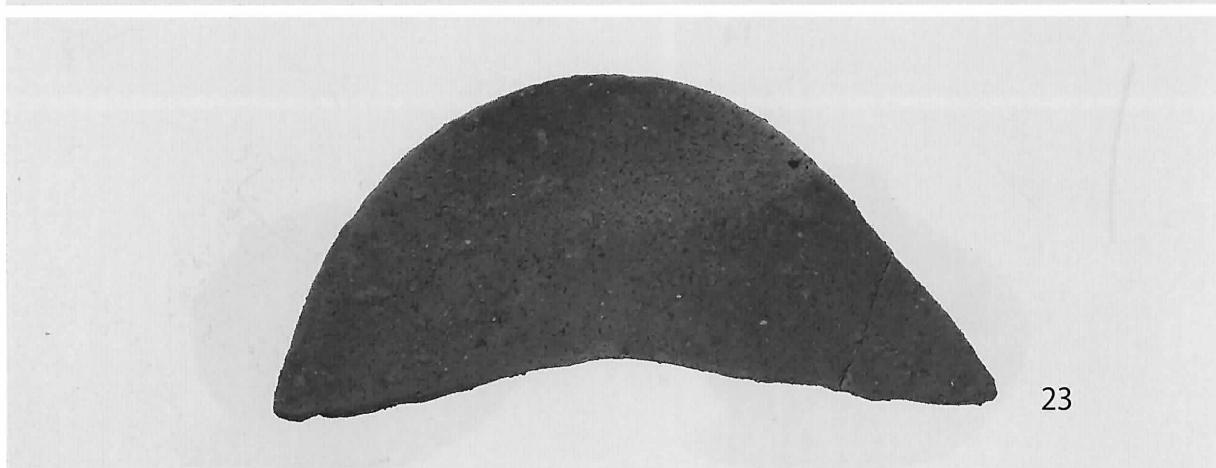
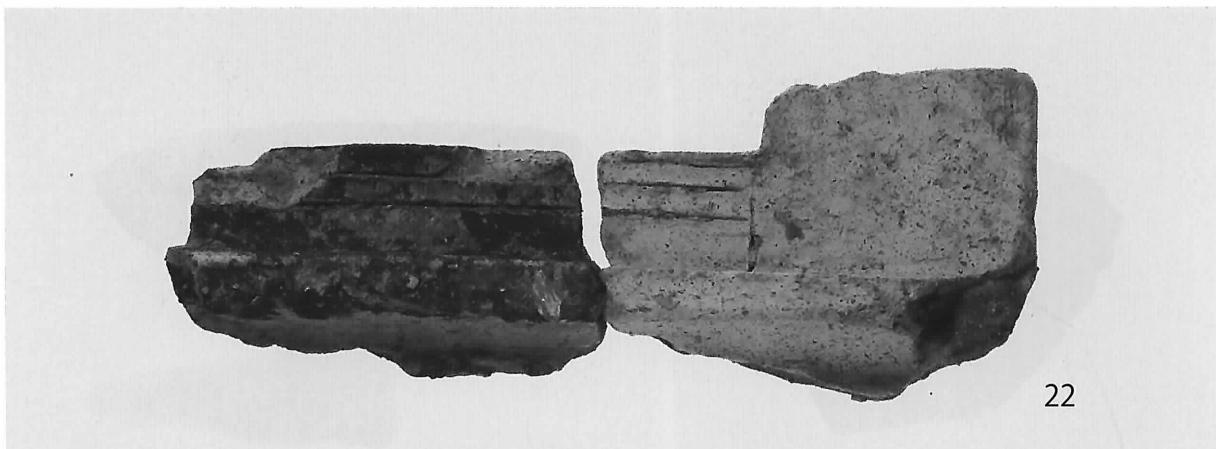


20

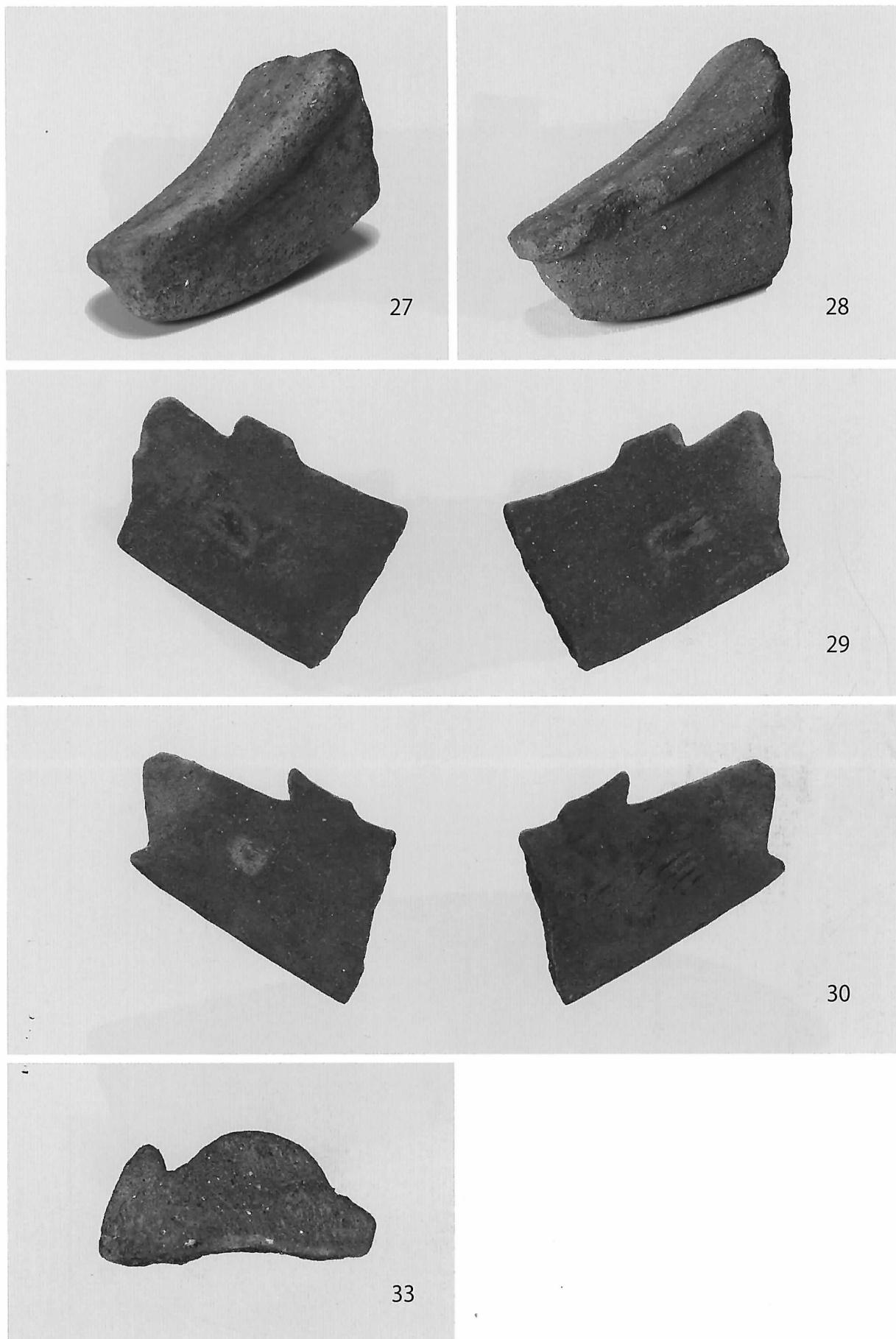
21

土師器（高杯・壺）

図版12

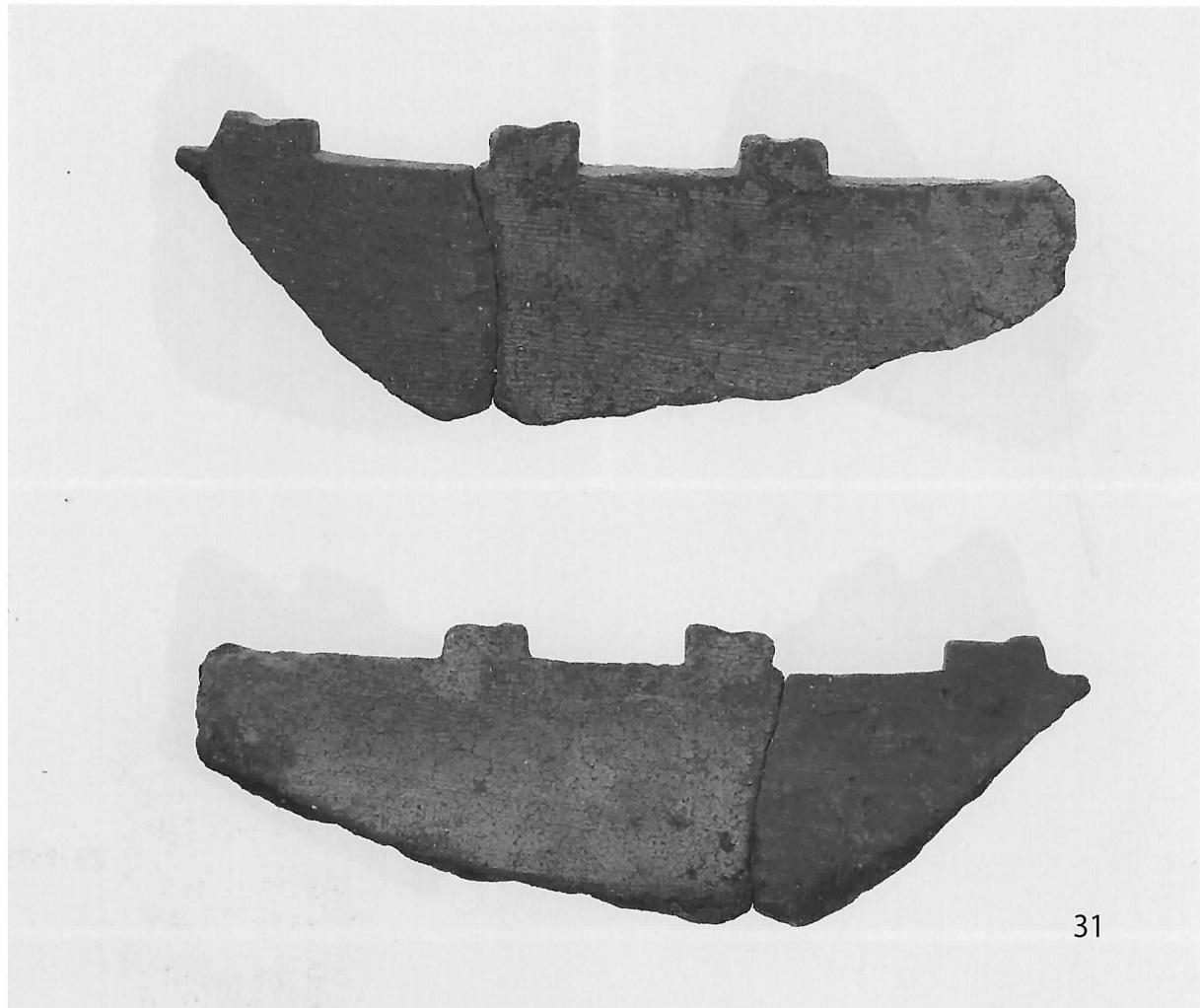


形象埴輪（家・鞍・盾 他）



形象埴輪（船）

図版14



31



32

形象埴輪（船）

報告書抄録

ふりがな	しせきしぶのまるやまこふんはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	史跡渋野丸山古墳発掘調査報告書						
副書名							
巻次	I						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	西本沙織						
編集機関	徳島市教育委員会						
所在地	〒770-8571 徳島市幸町2丁目5番地 Tel088-621-5419						
発行年月日	平成29(2017)年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
史跡渋野丸山古墳	徳島県徳島市 渋野町三ツ岩・学頭	36201	201-7	34度 0分 33秒	134度 31分 45秒	平成26年1月6日 ～平成26年3月31日 平成27年1月7日 ～平成27年3月13日 平成28年1月18日 ～平成28年2月26日 平成28年10月4日 ～平成28年12月28日	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項
渋野丸山古墳	古 墳	古墳時代		墳丘 周濠		埴輪・土師器	

史跡渋野丸山古墳発掘調査報告書 I

平成 29 年 3 月 31 日

発行 徳島市教育委員会

編集 徳島市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社濱田印刷



